

結果ばかり求めなくていい。

〝今、夢中になっている、
その道中に、目的がある



みずから気づく



料理研究家
土井善晴

今の高校生の周りには、手軽に楽しめる娯楽やサービスがいくらでもあります。退屈する暇もありません。社会の風潮が、非効率な作業や時間を無駄なものとして、徹底して、時短、タイパを肯定しているように感じます。つまり、面倒なことを否定し、単純化するシステム優先の社会です。そのおかげで、若い人たちが物事に慣れて、手早く手を動かし、自ら工夫して、効率よく作業を進められるようになる機会が潰されているのです。

子どもたち一人ひとりに魅力があって、素敵な才能を持っていると私は信じます。きっと、その子を愛し、心の支えにして生きている大人がいるはずです。その子が持っている魅力は、その子自身のセンスです。それは人と人の間にいることで、身につけたものでしょう。その魅力が、その子の人生の「土台(器)」です。

全ての学問は、その土台の上に積み上げてこそ、個性的で役に立つ学問になるのです。土台とは、中身です。数字合わせではなく、土台の上に自ら積み上げる力です。土台とは心ですから、数字に心がこもるのです。心のあるものだけが世界を動かします。

人間は自然の一部であり、人間は料理する動物です。つまり、生きていくための料理とは、人間の条件の大前提です(H・アーレント)。家族は一つの生命体です(現代では、料理しなくとも生きられると言う人もありますが、それは自立ではなく、そこに自由はないと思います)。

料理するとなるとレシピを探す…レシピは誰かが考えたことを、なぞる行為です。原初的な生きていくための料理とは、ある食材を、焼くか、煮るか、炒るか、蒸すか、生すかして、食べられるようにすることです。そうした超純粋なところから料理を始めれば、調理の行為の全てを意味づけられるのです。つまり自らの気づきに基づいて作業を進めることになる。多くの調理は化学変化ですが、時間は待ってくれません。じっくり考える間はなくて、えいやと判断する。結果、否応なく直観を働かすことになるのです。無論、満足できる結果ばかりではありませんが、それが経験です。そのように原点から、経験を積み上げていくのです。調理の目的は、人間のあらゆる情緒に影響し、行為していることにも気づくのです。

料理は人間の物質代謝ですから、あらゆる物事、行為の起点にあります。つまり基準は私たちの日常の暮らしにあるのです。基準がなくては判断できない。暮らしの土台が基準となるのです。土台をもつことで、誰にも、自ら人生を豊かにするチャンスがあると信じます。

Profile

どい・よしはる ● 1957年、大阪生まれ。スイス、フランスでフランス料理を学び、帰国後、大阪「味吉兆」で日本料理を修業。1992年に「おいしいもの研究所」を設立。東京大学先端科学技術研究センター客員研究員、十文字学園女子大学特別招聘教授、甲子園大学客員教授。2022年度文化庁長官表彰受賞。

味つけはせんでええんです(ミシマ社)



みずから気づく



料理研究家
土井善晴

取材/塚田智恵美 写真/吉永智彦

今、探究を どう進めるか？

「総合的な探究の時間」の本格実施から2年が経過しました。

「これでいいのだろうか」「本当に意味があるのだろうか」…。

時にはそんな不安やモヤモヤを抱きながら

取り組まれている先生もいらっしゃるのではないのでしょうか。

探究が学校の日常になっていく今だからこそ、生徒にとって、
先生にとってどんな意味があるのか、そして実際にどのように取り組んでいくのか。

本特集の何か一つでも、皆さんの探究活動の一助となるよう、

『キャリアガイダンス』では改めて考えてみました。

構成・文／長島佳子

探究の ここまで を見る

5

ページ



「探究」は個々の学校の裁量で進められていることから、自校の位置づけがわかりにくい場合もあります。全国の先生や高校生への調査や教育関連のデータから、客観的な探究の近況を見てみましょう。



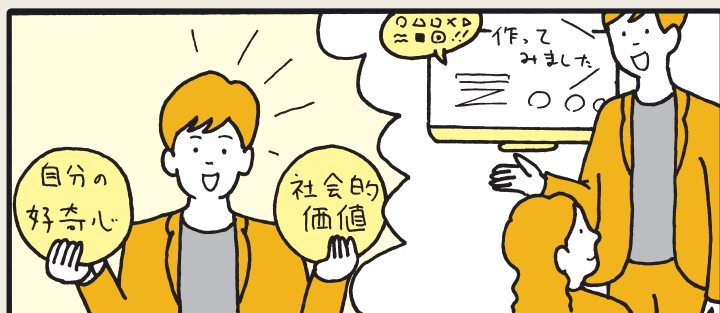
「期待している」
と回答した生徒

64.7
%

なぜ探究なのか

11
ページ

なぜ学習指導要領で探究が重視されているのでしょうか。そもそも探究の意義とは何なのでしょう。改めて探究の基本に立ち返るとともに、探究的なマインドを重視する企業事例とともに紐解いていきます。



27
ページ

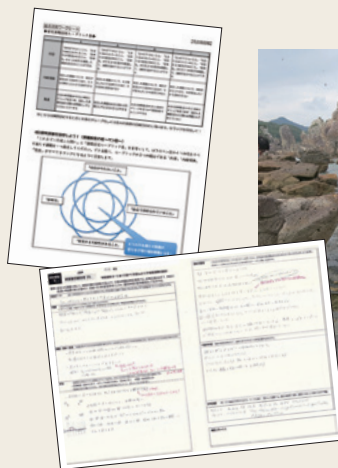
探究と社会とのつながりは？

「自分なりの課題=問いを見つけ、解決策を探る」。探究のカギとなる問いは地球、地域、家族、組織、商品、働き方などあらゆる事象に存在し、それらに挑む人々で社会は成り立っています。自治体、企業、起業した組織などで活躍する社会人たちの具体例から、探究と社会のつながりを探ります。

40
ページ

どう推進していくか

探究をカリキュラムとして始めてみて、さまざまな壁に直面している先生や学校の声が多く聞かれます。学校外との連携、予算、評価、指導法など、模索しながら解決策を見つけている学校の実践事例を、壁の乗り越え方の参考にさせていただければと思います。



データで
見る

探究の ここまで

学習指導要領改定によって「総合的な探究の時間」が本格実施されて2年が経過。進度や深度はそれぞれですが、全国の先生たちや生徒自身はどう感じているのでしょうか。

高校の入り口である小中学校や、出口の先の大学での捉え方など、探究を取り巻く「近況」をデータで見えていきます。

構成・文／長島佳子 イラスト／松田奈津留

Theme 1

高校の先生に聞いた、
探究の“近況”

Theme 2

高校に入る前はどうか？
大学は探究をどう見ている？

Theme 3

生徒たちは
探究に期待している!?

大学から社会までつながる 探究での学びの近況とは

以前から学校現場で「総合的な学習の時間」に取り組むなか、「探究」という言葉が聞かれるようになった。2010年代から学校独自で課題研究などとして、生徒が自らの興味関心から立てた問いについて教科横断的な方法で解決策を探し、自分の考えをまとめる探究学習に取り組み始めた高校もあり、「総合的な探究の時間」と名称が変わる前から小誌でもたびたび先進校の実践例として紹介してきた。

そして新学習指導要領が実施され始め、その下で学ぶ生徒たちが3年生になった今、改めて探究活動がどのように学校現場に浸透しているのか、先生たちは何に悩み、生徒のどんな変化を感じているのか、また探究学習

で学ぶ意義についてデータを基に考えてみることにした。

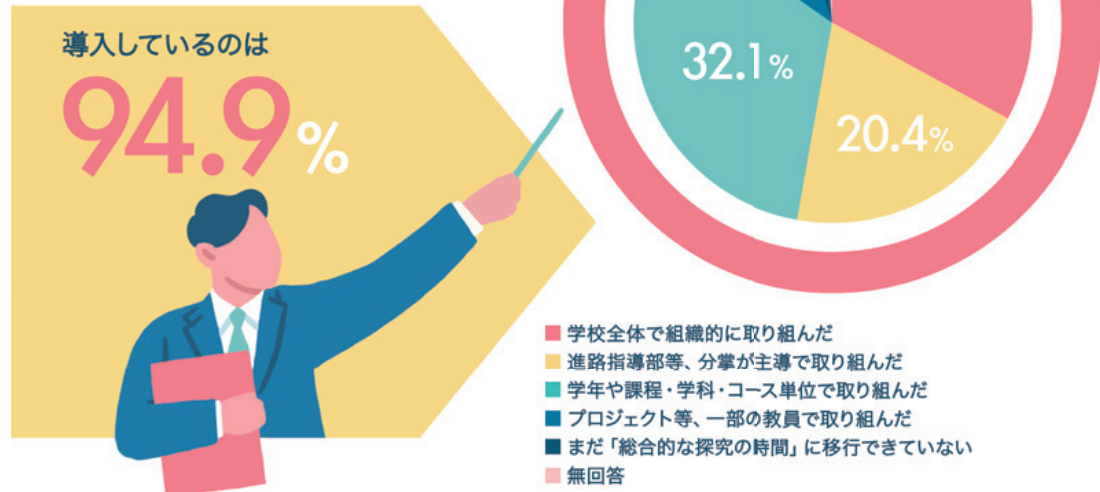
ここで紹介した数値には表れないところでも、探究科や探究コースの新設情報を目にすることも多くなったのではないだろうか。大学の入試でも総合型選抜のなかで特徴ある探究入試を実施することで、より生徒が学びたいことと自学の学びのマッチングを図ろうとする大学も数多く存在し、今後も増えていくことが予想される。特に国立大学での総合型選抜の増加は、従来の知識もおろそかにすることなく、幅広い資質・能力や学びに対する姿勢が求められていることを物語っている。それは言うまでもなく、大学の出口である社会が求めている力だからだ。

全国の先生たちの思いと共に、学びのこれからを考えるために、探究の近況を見ていくことにしよう。



「総合的な探究の時間」の取り組み方は？

2022年の調査時点で「総合的な探究の時間」を導入している学校は94.9%に及び、そのほとんどの学校が学校全体や分掌主導、学年ごとなど組織的に取組を始めていた。組織で取り組むために、分掌に「探究部」ができた、探究担当の役職を設置する学校が増えている。



教員から見た生徒の変化

- 生徒の姿勢が前向きになった。調べて発表することで、与えられたテーマへの理解を促すだけでなく、ほかの生徒の発表内容にも注目し、自己との比較を経て自分のものに取り込もうとする姿勢も見られた。[東京都／国立／専門学科]
- 自分の進路目標への興味関心を深めた生徒が少なからずいた。[岐阜県／県立／普通科]
- 地域の多様な方と関わる中で視野を広げることができている。体験、実践を通して気づきを得て自信をつけている。[岡山県／県立／普通科と他学科併設]

教員自身の変化

- 特に地域に関わる内容に関して、生徒と同じ目線で興味関心をもって取り組んでいる。教員も生徒たちも知るといふことに積極的になってきている。[秋田県／県立／普通科]
- 学年全体で探究活動の補助・指導に当たることが当たり前のこととして定着した。[岩手県／県立／普通科]
- これまで調べ学習が中心であった総合学習の時間だったが、教員が生徒たちに考えさせること、丁寧に振り返りさせることをこれまで以上に意識するようになったと感じる。[京都府／府立／普通科]
- 学校外との関連・ミッションや、授業分野以外の研鑽に費やす時間が確保できにくく、一部の教員に負担がかかっているように思う。[大阪府／私立／普通科]

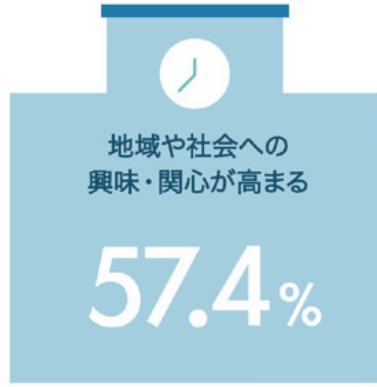
※末尾カッコ内の表記は [都道府県/設置者/高校タイプ]

「総合的な探究の時間」での生徒の変化は？

(「総合的な探究の時間」導入校)

「総合的な探究の時間」の取組によって、学力の3要素や育成すべき資質・能力について、「主体性・多様性・協働性」が向上したと感じている先生が最も多かった。フリーコメント欄にあるような、生徒、教員それぞれの変化、発見を感じている先生も少なくない。





探究活動は、生徒の 進路選択にどうつながる？

ほとんどの学校の先生が、探究活動が生徒の進路選択へつながると考えており、回答選択肢のいずれも半数前後に及んでいる。なかでも「地域や社会への興味・関心が高まる」が最多で、生徒が実社会とのつながりを認識しやすい学び方が探究活動だと捉えられているようだ。



取り組むうえでの課題は？

先生たちにとって従来の教科とは異なるアプローチが必要とされる「総合的な探究の時間」についての課題は、「教員の負担の大きさ」が群を抜いて最多だった。自身の担当教科プラスαの仕事と感じて模索中の先生や学校も多く、生みの苦しみの時期なのかもしれない。

※株式会社リクルート「高校教育改革に関する調査 2022」報告書より編集部にて再構成

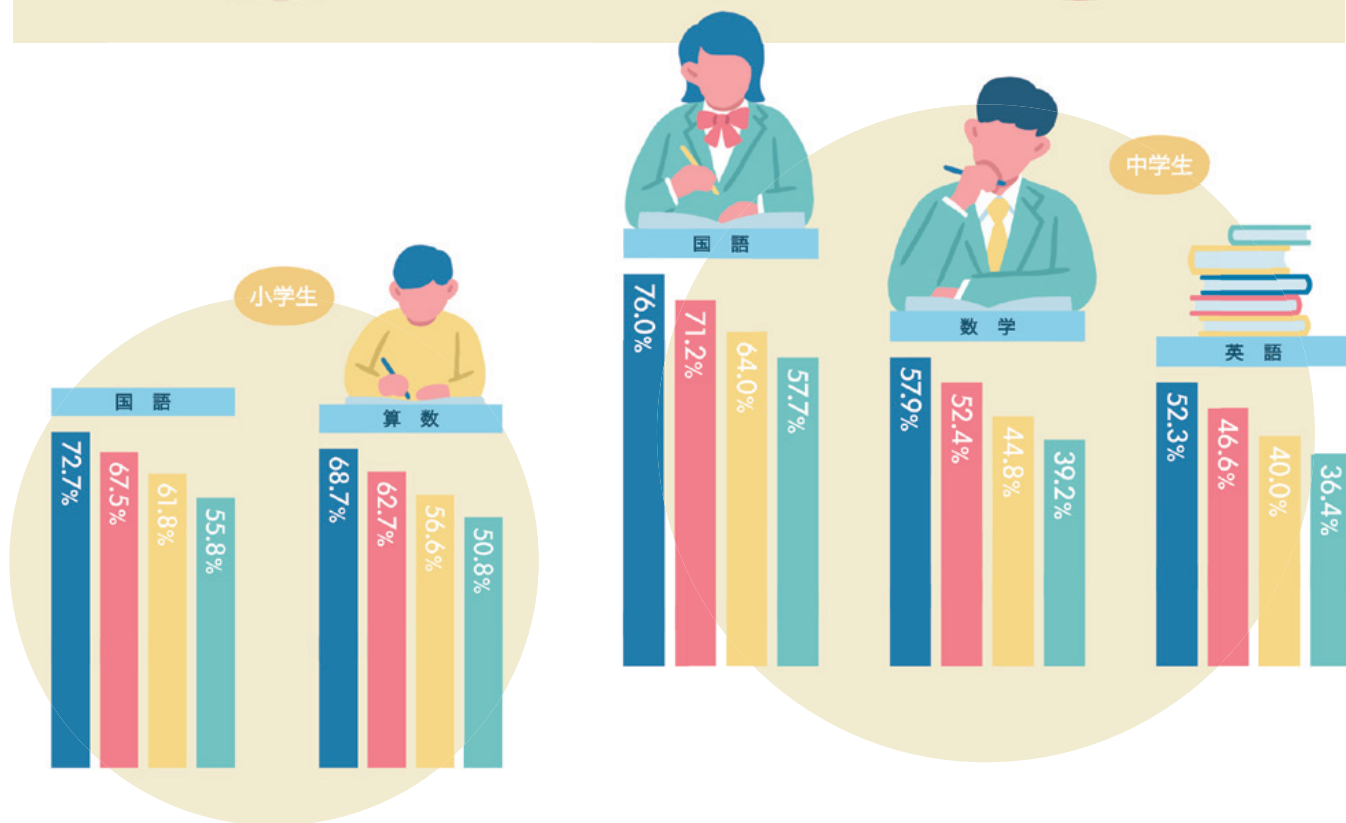
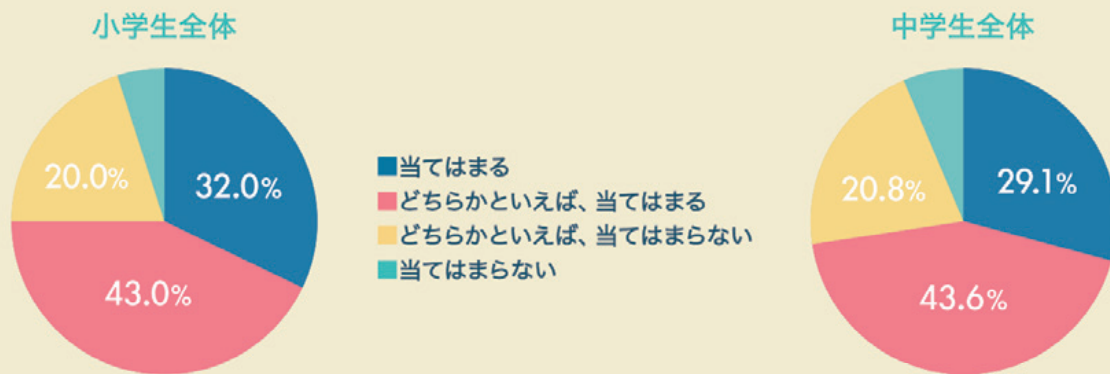
高校に入る前は どうだった？ 大学は 探究を どう見ている？

Q 「総合的な学習の時間」への取り組みと、 教科の学力の関連は？

このグラフは、小中学生対象の「全国学力・学習状況調査」において、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいるか」への回答と各教科の正答率をクロス分析したもの。設問に「当てはまる」と回答した児童生徒の方が、教科の平均正答率が高い。6ページで基礎的な学力の向上を感じる高校の先生は22.6%だったが、取り組み方によっては教科学習との相乗効果を期待できる可能性が見える。

※「令和5年度 全国学力・学習状況調査」児童生徒質問紙と学力のクロス分析(国立教育政策研究所)より

総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、 調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいるか





探究活動と 大学入試の関連は？

現在は国立も含めて大半の大学で総合型選抜が行われており、高校時代の探究活動をその評価対象としている大学も増えている。さらに総合型選抜による入学者比率も増加傾向にあることから、大学が探究活動で育まれる力を重視し始めていることが読み取れる。

※令和5年度国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要(文部科学省)より

大学では総合型選抜を実施する大学数も入学者比率も増加。探究活動が入試でも重要視され始めている！

Theme 3 生徒たちは探究に期待している!?



学校では探究学習が 重視されていると感じている？

自身の学校で探究学習が重視されているかについて、2019年の調査では感じている生徒が半数以下だったのが年々増加傾向にあり、2023年の調査では6割以上が重要視されていると答えている。生徒たちも自分たちが身につけるべき学び方や学校の変化を確実に感じ取っている。

Q 探究学習が重視されることに期待している?

探究に対して教科での学力とは異なる能力が養われることへの期待をフリーコメントで回答する生徒も多く、探究学習が重視されることについて「期待できる」と肯定的に受け止めている生徒が64.7%と、生徒たちの探究への前向きな気持ちが数値でも表れている。

「期待している」と回答した生徒

64.7%

Q 「総合的な探究の時間」を通じて自己理解が深まったと感じている?

「総合的な探究の時間」を通じて「自己の在り方や生き方、興味関心への理解が深まった」と答えた生徒は26%。「総合的な探究の時間」がスタートして1年半経過した時点で1/4の生徒が自身の変化を感じられていることは、今後の効果を期待できるのではないだろうか。

探究で自己理解が深まった生徒たちの声

- 探究活動についてプレゼンテーションを行ったのだが、その場面の発表で、自身がプレゼン資料を作るの得意としていたことを実感した。[宮崎県/女子/大学]
 - SDGsで水の問題について考えたとき、自分には何ができるのかや、世界の深刻な状況を知ることができた。[秋田県/女子/専門学校]
 - 話を聞くだけではわからなかったことが、自分たちでなぜそうなったのか話し合い答えを見つけることによって、知識が定着した。[奈良県/女子/専門学校]
- ※末尾カッコ内の表記は[都道府県/性別/希望進路]

感じている

26%

まだ感じていない

36%

わからない

34%

※一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルート合同調査 第11回「高校生と保護者の進路に関する意識調査」2023年報告書より編集部にて再構成

全国の学校で取組が始まった探究の近況について、現場の先生たちは今までとは異なる生徒の成長や変化を感じ始めていることがデータでも見て取れた。その一方で実際に授業を行ってみて、負担感や自身の認識不足などを抱え、混乱している学校もあるかもしれない。

今一度、原点に立つと、「総合的な探究の時間」がカリキュラム化された背景には社会

の変化があり、求められる資質・能力の育成のために、今までとは異なる学び方も必要とされていることは先生たちも認識のうえ取り組んでいると思う。さらに、学びの主役である生徒たち自身が探究活動へ高い期待を寄せている。改めて、学校で探究活動を行っていく意義や、社会とのつながりについて、次ページ以降で具体的に考えていきたい。

今、改めて考える 探究の意義と向き合い方

内容も新たに2022年度に本格導入された「総合的な探究の時間」。
初期の熱気が落ち着いた今、改めて探究の意義や向き合い方について、
立命館宇治中学校・高校の酒井淳平先生に伺いました。
酒井先生は、探究に関する著書もあり、探究&キャリア教育について
広く発信しています。後半の企業トップとの対談とあわせてご覧ください。

＼お話を伺った方／

立命館宇治中学校・高校
酒井淳平先生

立命館中学校・高校を経て、2008年立命館宇治中学校・高校に異動し、キャリア教育部を立ち上げる。2018年度文部科学省研究開発学校、2019年度同WWLの指定を受け、探究×キャリア教育を核とした「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発に尽力。著書に「高等学校 新学習指導要領 数学の授業づくり」「探究的な学びデザイン」(明治図書)など(14ページ参照)。



第1部 なぜ今、探究なのか

キーワードに振り回される学校と キーワードを共通言語にする学校

皆さんは、探究もしくは総合的な探究の時間(以下、総探)という言葉が出始めたとき、どのような印象をもたれましたか? 「うちの生徒には難しい」と思った方もいれば、「新たなよくわからない仕事而降ってきた」と気が重かった方もいるでしょう。

私の場合、「またか」と感じてしまいました。

かつて見た光景が繰り返されるのではないかと危惧したのです。

例えば「キャリア教育」がそうでした。本来、人生をどのように生きるかという在り方生き方教育であるはずが、「職業講話やインターンシップのことでしょう」と一面的に捉えられ、「忙しくて余裕がない」とか、「うちは進学校だから関係ない」と受け止められてしまったのです。アクティブ・ラーニングも同様、表面的な「型」と誤解されてしまい、その後「主体的・対話的で深い学び」に言い換えられた経緯があります。

探究もまた、ブームのように広まることで、本質を理解せず、単なる調べ学習で終わったり、教員が介入しすぎ、肝心の生徒が置いていかれたりするのではないかと思いましたが、実際、そのようなケースも多いでしょう。

このように新たな施策や流行りのキーワードに振り回されることがある一方で、キーワードを自分たちの学校にマッチしたものへと読み替え、校内の共通言語にして授業改善やさまざまな実践に取り組み、教育力を向上させている学校もあります。この差はどこで生じるのでしょうか。そんなことを念頭に、改めて現場目線で探究について考えたいと思います。

多くの課題を抱える社会だが 若者が活躍する機会も確実に増加

なぜ今、探究なのでしょう。新しい学習指導要領の根幹にあるのは、生徒観・学力観の転換です。生徒を教育の対象としてではなく、学びの主体へと転換する。与えられた問題に受動的に取り組むのではなく、学びの

オーナーシップを生徒がもつ。大切なことは生徒を、サービスを受ける「お客様」ではなく、自ら価値を生み出す「生産者」へと育てることだと私は思っています。

大学に入学してから学力観を転換すれば間に合った時代もあったかもしれませんが、今の大学生はすべきことが多く、就職活動に取り組む時期も早まっています。また、高校卒業後、すぐに社会に出る生徒もいます。人材教育にかかる余裕がない企業が多いことも踏まえると、高校段階から自ら課題を発見し、解決に向かう力を鍛えることは大切です。

そうした力は、どこで育つのか。カリキュラム全体を通して、とは思いますが、軸となるのはやはり、学習指導要領の目標に「よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成する」という一文のある総探においてでしょう。関心のある課題について、情報を集め、さまざまな体験を通じて整理・分析し、他者とも関わりながら自分なりにまとめ、表現するという一連の学習プロセスは、



レポートやゼミ活動を中心とした大学での学びと親和性があるばかりではなく、社会で必要な力そのものだとも思います。

今の社会はさまざまな課題を抱えてはいますが、一方で、若い人が活躍する機会が増えています。十数年前であれば、高校生が起業したり、学会で発表したりはもちろん、企業や地域を巻き込んで実際のプロジェクトを進めることさえ珍しいことでした。総探は、そうした一歩を踏み出す機会になるはずです。

第2部 探究の落とし穴

管理、指導するという マインドセットからの転換を

西大和学園中学校・高校の梨子田 喬先生
(元岩手県立大船渡高校)は、私との共著『探

究が進む学校のつくり方』において、教員のマインドセットについて次のように書いています。
——教員のマインドセットには、星の王子さまの「実業家」のような生真面目さがあります。
①全員が同じようなことを、同じように取り組んで、同じような到達度に至らないといけないとか、②先生が全員の学びを管理し、アドバイスを通して答えのようなものを生徒に落とさなくてはいけないとか、③生徒にはきちんと成果を出させ、成果が出ない生徒には指導を加えなくてはいけないとか、④公平公正客観的に全員を評価すべきとか、挙げればきりがありません。(数字は編集部)

ただ、こうしたマインドセットを変えることは容易ではありません。私自身、数学の授業で「このクラスは、このままではまずいな」と不安なときほど、②や③のようなマインドに陥り、生

サービスを受ける「お客様」ではなく、
自ら価値を生み出す「生産者」に



徒に考えさせようとはせず、一方向のレクチャーが増えてしまいます。その結果、生徒がより理解できなくなるという悪循環に陥ってしまうのです。

その点、「教員はこうあるべき」という思い込みから脱却しやすいのが総探ではないでしょうか。そもそも総探は、教科の専門性が役に立つとは限りません。本校でも数学関連の課題を設定する生徒は少ないため、私のような数学の教員にとっては専門外のテーマばかりです。知識がないだけに「伴走」するしかありません。ただ、知識がないことで生徒と一緒に考え、素朴な疑問を投げかけたり、必要に応じてその分野に詳しい人を紹介したりしよとできているのかもしれませんが。また、生徒に教えようとすることもなく、生徒の思考の深まりを共に楽しめるようになってきているかもしれません。

総探はまた、思わぬ形で生徒の成長に立ち合わせてもらえます。梨子田先生も先の文章に続き、③や④を念頭にこんなエピソードを紹介しています。

——以前、貼られた白紙のポスターを前に苦笑いしながら「間に合わなかったんで」と言っ

て20分も熱弁を振るっている生徒がいました。カラフルなポスターの前でよく準備された原稿を読んでいる生徒の発表より、はるかに探究の質が高かったです。また、「結局うまくできませんでした」という発表をした生徒もいました。しかし、その試行錯誤の過程は論理的で筋が通っており、内容にも人を唸らせるものがありました。成果がなくても十分探究の深さを感じることができました。

このエピソードに共感する先生は多いのではないのでしょうか。発表会はあくまで、次のステップに進むきっかけを与えてくれる場所。確かに、見栄えのいい発表やコンテストでの受賞といった成果も素晴らしいですが、それ以上に、予想を超えた生徒の成長を喜ぶ先生が多いでしょう。生徒の成長こそ教員の一番の成功体験。「こうあるべき」というマインドセットから転換する何よりの近道です。

教科の魅力を伝え、発問を変えることで日常の授業が探究的に

現行学習指導要領では、「総探」に加え、「理数探究」や「古典探究」「地理探究」など



『探究的な学びデザイン』

酒井淳平著(明治図書)

なぜ今「探究」が必要なのか。押さえておきたいポイントや落とし穴など、探究の進め方を現場の視点で解説。全国10校の実践事例も掲載。



『探究が進む学校のつくり方』

酒井淳平 梨子田 喬編著(明治図書)

探究の推進には教員個人だけではなく、学校組織としてどう向き合うかが重要という視点で、マインドセットから体制づくりまで事例を含めて解説。

の新科目が設置されています。総探とそれらの違いは学習指導要領解説に譲るとして(図1)、個人的には、探究を進めるうえで、特別活動(ホームルーム、生徒会、学校行事)や課外活動も大切だと考えます。例えば、クラスで文化祭の企画を決める際、この集団で、いかにいいものを生むか、そこに自分の役割をどう見だし、合意形成しながら納得解を導くかといったことは、探究そのものだと思います。ただ、総探も含め限られたコマ数や放課後の活動だけで真の力がつくわけがありません。としたとき大切なのは日々の授業です。

そもそも今ある学問は、先人の探究の成果の蓄積です。教員は、その学問や教科に魅力を感じて教職に就いたわけなので、そうした思いを語るだけでも、授業に探究の要素が入るのではないのでしょうか。(図2も参照)。

教科の授業を探究的にするというと、大事に聞こえますが、発問一つで変わることを教えてくれたのは授業名人として知られる教育学者の故 有田和正先生です。有田先生は小学校の社会の授業で「バスの運転手さんは、どんな仕事をしていますか?」ではなく、「バスの運転手さんは、どこを見て運転しています

図1 「総探」と他教科・科目における探究の違い

総合的な探究の時間で行われる探究は、基本的に以下の三つの点において他教科・科目において行われる探究と異なっている。一つは、この時間の学習の対象や領域は、特定の教科・科目等に留まらず、横断的・総合的な点である。総合的な探究の時間は、実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する事象を対象としている。二つは、複数の教科・科目等における見方・考え方を総合的・統合的に働かせて探究するという点である。他の探究が、他教科・科目における理解をより深めることを目的に行われていることに対し、総合的な探究の時間では、実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する問題を様々な角度から俯瞰して捉え、考えていく。そして三つは、この時間における学習活動が、解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や、唯一の正解が存在しない課題に対して、最適解や納得解を見いだすことを重視しているという点である。(『高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編』より。下線は編集部)

図2 立命館宇治中学校・高校での実践

「問いを立てる授業」の素材として 教員が語る「その教科を学ぶ意味」

同 校では、「お客様から生産者へ」をキャッチフレーズに、自ら価値を生み出す人になるべく3年間かけてマイテーマを深める「コア探究」というカリキュラムを実施。その導入として1年次に実施するのが「問いを立てる」という単元だ。生徒は、問いを解くことはあっても、問いを立てることに慣れていない。例えば講演会の質疑応答で手を挙げる生徒は多くない。そこで、何らかのコンテンツを受講したあと、質問を考えたいうえで、質問に優先順位をつけるといったグループワークを実施。コンテンツ自体は何でもいいなかで、毎年実施しているのが、「教員が語る教科を学ぶ意味」というプレゼンだ。酒井先生の場合、「数学は最もグローバルな言語であること」「古今東西の数学者の夢の集まりであること」「暗号や生成AIなど数学抜きで現代社会は成り立たないこと」などを語る。あくまで狙いは、問いを立てる力の育成だが、教員自身が改めて教科に向き合い、生徒に思いを伝える良い機会になっている。しかも、事前に教員同士で予行演習をすることで、他教科の見方・考え方に触れられるうえ、「この人、こんな熱い思いをもっていたのか」などチーム感の醸成にもつながっている。

見栄えではなく探究の質を重視。 生徒の成長という成功体験が原動力に

か?」と児童に尋ねました。前者の場合、「バスの運転」とストレートに答えがちですが、後者のような発問になると、運転手さんが日々行っている業務について、頭の中であれこれと思考を巡らせることになります。

高校にいと、こうした小・中学校の実践は見えづらいものです。義務教育段階においても総合的な学習の時間の長い蓄積によって、これまでと異なる児童や生徒の姿があります。ひと昔前であればグループワークにも慣れていなかった中学生が今は堂々とプレゼンテーションを行うことも。私の勤務校の近隣にも先進的な実践をしている中学校がいくつもあり、そこから学べることは少なくありません(図3)。地域にある中学校の取組を踏まえ、高校はそれをどう受け止めるか。探究という言葉を通言言語に、より良い学校間連携を深める機会だと思えます。

第3部 探究の組織論

探究を活用して学校を変える。 キャリア教育はその切り口に

良くも悪くも国を挙げて「探究」を合言葉にしているわけですから、探究を共通言語として、それぞれの実情にあわせて学校を変える

図3 義務教育段階での探究実践と高校との連携

京都府宇治市立黄檗中学校(宇治黄檗学園)

宇 治黄檗学園は、小1から中3までが同じ校舎で過ごす公立の小中一貫校。令和元年に京都府教育委員会による「未来の担い手育成プログラム」の研究指定を受け、総合的な学習の時間を中心に、7年生は防災、8年生は企業連携、9年生は宇治市への提言という流れで課題解決型学習に取り組む。連携企業から受けた課題は「世界中に日本茶を広めるにはどうすればよいか」というもの。当初の心配をよそに生徒のなかに「自分たちで課題を何とかしたい」という当事者意識や主体性が芽生えるなど、担任が驚くような成長を見せる。一方で、中学生では行動範囲が限定されるという課題や、取り組んでいる学習が高校、大学、社会へどうつながるかイメージさせたいという新たな思いが生じ、立命館宇治高校との協働学習が実現。互いのプロジェクトを発表し、意見を交換しあった。中学生からは、「高校生は課題を自分たちで見つけアクションを起こしているところがすごい」「3年後の自分の姿をイメージできた」という感想が、高校生からは「斬新なアイデアが多く刺激になった」という感想があがった。

チャンスだとも思えます。私自身は、2017年度に校内のカリキュラムを変える際、カリキュラム委員会で交わした「最近の生徒は真面目で素直だけど、受け身になってないか。問題意識をもって、自分から動き人生を切り開けるよ

うなマインドやスキルを育てたい」という議論を受け、私自身のライフワークでもあるキャリア教育の要素を総探の核として取り込むことにしました。

そもそも総探は、学習指導要領の目標に「自己の在り方生き方を考えながら」とあり、解説においても「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し」とあるなど、キャリア教育と切り離せないものです。

そこで「本校の総探はキャリア教育の視点を重視して取り組む」と決意。メンバーの理解を得たうえでカリキュラムを設計しました。“思い”を載せることなく「総探の担当になったから仕方なく」という受け身のマインドだったとしたら疲弊しか生じなかったでしょう。

そうならないためにも、取組に際して3つの質問を自分なりに考えてみてはどうでしょうか。
1「学習指導要領ではなぜ探究を重視しているのでしょうか」
2「あなたの学校ではなぜ探究に取り組むのでしょうか」
3「あなた自身は探究についてどう思いますか」

組織人として**2**を正しく理解することは必要ですが、それだけではやらされ感が生じかねません。**2**がMUSTだとしたら、**3**はWILL。「自分はこうしたい」という意志は欠かせませ

ん。もちろん公教育を担う以上、社会全体を視野に入れる必要があり、それが**1**の理解です。個人の思いと学校の狙いが重なる部分をいかに広げるか。それもまた教員の探究課題になる気がします。

冒頭に投げかけた「流行りのキーワードに振り回される学校と、キーワードを共通言語にして教育力を向上させる学校の差はどこで生じるか」に対する私なりの答えは、なぜそれをするのかという本質から考え、共有できているかどうかの差だと思います。WHY(なぜするのか)が忘れられ、HOW(どのようにするか)ばかりに目が行く学校の違いと言ってもいいでしょう。「何のために探究をするのか」。この哲学をもち共有することが取組を成功させる鍵だと思います。

「より良い授業づくり」こそ 教員にとって最大の探究課題

先に「生徒を学びの主体へと転換する」「学びのオーナーシップを生徒に」とも述べましたが、学ぶのは生徒だけではありません。教員も探究し続ける必要があるはずです。教員にとっての永遠のテーマは「より良い授業づくり」でしょう。そのためには知識や技能だけでは

大切なのはHOW(どのようにするか)
 ではなく、WHY(なぜするのか)

足りません。仮説を立て、検証し、改善する。行きつ戻りつしながらも探究サイクルを回し続けることです。

より良い授業をつくろうと思うと、その根っことして「なぜこの教科を生徒は学ぶのか」とい

う本質をついた問いが必要です。そうやって教員が探究していると、同じように探究している仲間が全国にいることに気づき、力が湧いてきます。それもまた探究を進める原動力になるでしょう。

Let's Try

Point

- HOWの前に、まずWHYを大切に
- 「～しなければ」ではなく「～できたらいいな」と考えてはどうでしょう
- 同僚の先生は、どのような考えをおもちでしょうか

Q

1

学習指導要領ではなぜ探究を重視しているのでしょうか？

Q

2

あなたの学校ではなぜ探究に取り組むのでしょうか？

Q

3

あなた自身は探究についてどう思いますか？

探究学習 「その先」にあるものとは？

「探究」で培われた力やマインドは、社会でどう活かされるのか。

立命館宇治中学校・高校の酒井淳平先生に引き続き登場いただき、同じ京都にある
障がい者雇用をメインミッションとしたオムロン京都太陽株式会社を訪問。

同社の探究的な取組ともいえる「人に業務をつくる」という考え方や
「徹底3S活動」の意義を中心に、長江 豊社長と語っていただきました。



オムロン京都太陽株式会社
代表取締役社長
長江 豊さん

×

Dialogue

立命館宇治中学校・高校
酒井淳平先生

1989年オムロン株式会社入社。生産総括本部、オムロン労働組合執行委員、EMCカンパニー企画室などを経て、2020年オムロンスイッチアンドデバイス株式会社 代表取締役社長。2024年3月より現職。

取材・文／堀水潤一
撮影／道海史佳（19ページ下段、22、23、26ページ）

キーワードに振り回される学校と キーワードを共通言語にする学校

——今回、高校での「探究」が実社会でどう活きるのか知りたくて、酒井先生と経営者の対談を企画させていただきました。なぜ、障がい者雇用の促進を使命とするオムロン京都太陽さんかという、立命館宇治中学校・高校と近く、共に若者を育てるという点で親近感があるのではということ。何より、工場での日々の改善活動が探究プロセスに

重なると感じたからです。まず会社の取組についてご紹介ください。

長江 弊社は、オムロン株式会社と社会福祉法人太陽の家の共同出資会社として1985年に誕生しました(本ページ下部も参照)。最大の特徴は、「業務に人をつけるのではなく、人に業務をつける」点です。一般的な工場は、まず業務があり、それに適した人材を採用します。対して、障がい者雇用の目的とした弊社では、それぞれの障がいや特性を見極め、できること(得意なこと)と、できないこと(不得

■オムロン京都太陽とは

障がい者雇用という社会課題の解決に向けて

オムロン株式会社と社会福祉法人太陽の家の共同出資会社として1985年に設立。きっかけは、整形外科医の中村 裕が1964年の東京パラリンピック日本選手団団長を務めた際、職業的自立を果たしている欧米の選手に衝撃を受けたこと。「保護より機会を」をモットーに太陽の家を開設し、障がい者の自立支援のため東奔西走。その過程で、「われわれの働きでわれわれの生活を向上しよりよい社会をつくりましょう」という社憲を有するオムロン創業者の立石一真と出会い、互いの理念が共鳴した。

立石は、「モノの豊かさを求めた工業社会の後は、心の豊かさに価値を見いだす自律社会へと移行する。その過渡期にあたる最適化社会では、工業社会で置き去りにされた社会課題の解決がテーマになる」と未来を予測。障がい者雇用もその一つと捉えた。

同社の代名詞となっているのが2005年度から実施している「徹底3S」と呼ばれる活動だ。常に改善していこうという風土醸成として始まり、整理、整頓、清掃に関する工夫から、生産性向上や品質向上につながる提案まで、

大小合わせて年間1万件以上の提案が出てくるという。「一人の100歩より100人の一歩」をスローガンにチーム単位の活動として行われ、管理職を含め全員が参加。定期的にアイデアを出し合い実行する。毎月の報告会のほか、年1回の発表会では表彰式も開催する。



Data

●設立/1985年 ●従業員数/63人。うち障がい者36人、健全者27人(2023年6月現在) ●事業内容/電気機械器具の製造 ●京都市南区

意なこと)を明確化、作業工程を細分化するなどして、できる作業を割り当てます。できないことに関しては、できないで終わらせるのではなく、治具や補助具、半自動機によるサポートや、複数人で分担するなどの仕組みによって(22ページの改善活動例も参照)、誰もが生き生きと働けるよう工夫を重ねています。

また、精神障がいや発達障がいがある方に対して、先進的なツールなどを活用しコミュニケーションの見える化を図り、相互理解につなげています。その結果、本人は「自己開示し助けを求める」、メンバーは「違いを認め補完しあう」、上司は「配慮はするが遠慮はせず指導する」といった密度の濃いコミュニケーションが行われています。

酒井先生には、先ほど工場を見学いただきましたが、どのようにお感じになりましたか？

酒井 一人ひとりが生き生き働く姿が印象的でした。「できないこと」を、自作の機械などで補っている様子を実際に目にし、とても驚きました。学校でも、「個性を大切に」とか「可能性を伸ばし」という言葉はよく使われますが、生徒の「できること」に着目こそすれ、「できないこと」も含めて、本当に一人ひとりの特性を理解し、可能性を引き出しているだろうか

と考えさせられました。

また、「配慮はするが遠慮はしない」といったコミュニケーションにも驚かされました。これについても、学校は「みんなで」という言葉を使う割には遠慮することも多く、教員同士、あるいは生徒や保護者と腹を割って話せているだろうかと自問していました。

長江 学校の先生は多忙で、生徒一人ひとりに対応したくてもできない状況にあることは耳にしています。消費者意識の高い保護者も増え、信頼に基づく厳しい指導、それぞれ「配慮はするが遠慮はしない」指導がしにくい現実もあるでしょう。弊社は、障がい者の雇用に特別の配慮をする特例子会社という性格から、社員一人ひとりとの対話を徹底しています。ただ、一般に日本の企業の多くは今、余裕がありません。丁寧なマネジメントや、先々を考えた人材育成をするべきなのに時間もお金もない。社会全体の課題だと思います。

「課題の設定」というハードルを越えるカギをどう見つけるか

——組織運営については後で何うとして、働く方々が問題に気づき、チーム活動を通じて改善策を提案し、課題解決につなげる。

設定すべき課題は、「ありたい姿」と
現実のギャップのなかに潜んでいる

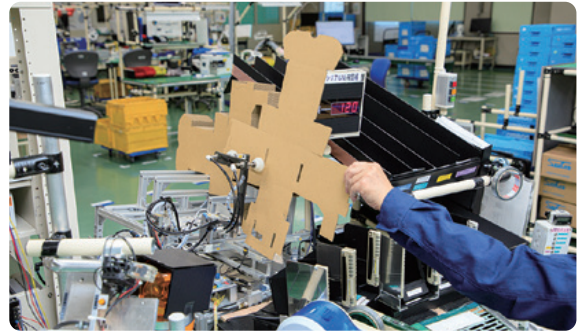
こうしたプロセスは探究そのものと感じました。

長江 今回、探究学習について知り、弊社が長年取り組んできた「人に業務をつける」改善活動や「徹底3S活動」と重なる点が多いと感じました。徹底3Sは、整理・整頓・清掃を徹底し、常によりよい職場にしようという風土醸成のために始めた活動ですが、障がいがある方の職域をいかに拡大するかも含め、生産性や品質向上のための改善活動へと広がってきました。例えば、工場にあるゴミ箱はすべてキャスターが付いています。車いす作業員でも掃除しやすいようにです。また、トラックヤードから各フロアにかけて色別の線が引かれています。知的障がいがある方が目的の場所に間違いなく部品を運べるようにする工夫です。このように、改善することはないか社員全員が常に考え、策を講じているのです。それが「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」というプロセスになっているかと聞かれると、「そんなカッコいいものでは…」と思いつつも、確かに、「探究」と言えると思います。

酒井 私も実は同じ感覚です。授業でこのプロセスを特に意識しているわけではないですが、生徒の探究の過程を振り返ったとき、こうした過程をたどっていることが多いと感じます。ただし、教員の思惑通りに展開するわけではないため、「この順番でなければいけない」みたいに縛られることのないよう注意しています。

“人に業務をつける”改善活動例

段ボール送り出し機



【課題】さまざまな材料が必要な製品の梱包工程では作業スペースに余裕がない。そのため段ボールのストックは奥に積まれており、車いすでは作業できなかった。

【改善】車いす作業員からの提案で、段ボールを一つずつ手元まで送り出す装置を開発。その結果、これまで段ボールを取るたび中腰になりスクワットに似た動きをしていた健常者の疲労低減にもなった。

間違い防止機構付きピッキングマシン



【課題】複数の部品を過不足なく袋詰めする工程は、ある種の障がいがある方にとって「ミスしていないか」という不安がつきまとっていた。

【改善】1500通りの中から事前に設定された光の点灯順にピッキングすればいい機構に改修。間違えるとセンサーが反応するためミスも生じない。文字が読めない方や、こうした作業を苦手とする方の職域が拡大することに。

片手作業者に最適化した製造ライン



【課題】ベルトコンベアで流れてくる製品の左右両側に部品を取り付ける作業を片手作業員が行う場合、両手作業員では不必要な、途中で製品の向きを変えるという工程が増えてしまう。

【改善】そこで右手作業員は右側だけ、左手作業員は左側だけを担当するよう工程を分割し、複数人で対応することに。これによってトータルの生産性は維持もしくは向上することに。

徹底3S活動の実践例

棚の上の仮置きを許さない「置けない君」



【課題】工場内は整理整頓が基本だが、慣れてくると「トイレに行く間だけ」「またすぐ使うから」などの理由で、棚の上に書類や筆記具などを置き、そのままにすることがあった。

【改善】そもそも物理的にモノを置けなくすればいいのではという発想で、三角形の物体を設置。当初すべての棚に設置したが、モノを置かない習慣がついた時点で随時撤去している。

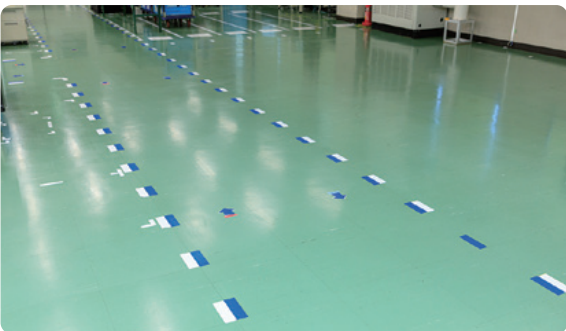
定位置に戻すためのファイル背表紙の工夫



【課題】キャビネットに並ぶ何冊ものファイル。目的のファイルをすぐ手に取ることができるよう定位置に戻す必要があるが、背表紙の文字や数字だけではどこに戻していいかわかりづらい。

【改善】そこで複数の背表紙にまたがるよう斜めのラインや図柄を入れ、左右のつながりをもたすことに。一目瞭然と定位置に戻すことが可能になった。

汚れによる貼り換えまで考慮した床の動線



【課題】工場内の床には動線を示すいくつものテープが一直線に貼られていた。ただ、車いすや人が多く行き来する箇所は次第に汚れが目立つよう。その場合、端から端まで貼りなおす必要があった。

【改善】汚れた部分だけピンポイントで貼り換えれば済むよう、テープを点線に。その結果、貼られていない部分を意識して横断することも多くなり、汚れを極小化する効果も。

長江 いずれにしろ、受け身の若者も多いなか、自ら「課題を設定」するって簡単なことではありません。仕掛ける側にも苦労があるのではと想像します。

酒井 探究活動に限らず、自分が何に関心をもっているか気づくことさえ意外と難しい。「野球が好き」という生徒がいても「野球の何が好きなのか」まで意識していないものです。そのため確かに課題の設定は難航し、最初に出てくるテーマは、どこかで聞いたようなものばかり。そんなとき私の興味は、内容自体よりも、「どう、つついたら生徒の世界が広がっていくかな」など、生徒の頭の中に向かいます。そこを起点に、それまで知らなかった世界に触れ、心から関心をもてる課題と向きあうことができればいいと思うのです。人との出会いと一緒に、最初から運命的なテーマに出会うなんてことはありませんから。

長江 企業のマネジメントでも、社員一人ひとりが課題感をもつことが大切ですが簡単にはいきません。そこで私は、“課題形成プロセス”という独自の手法を使っています。まず、仕事の「目的」に照らして「ありたい姿」を考えてもらい、それと現状のギャップを現象としての「問題」と捉えます。そして、「原因」を掘り下げることによって解消すべき「課題」を明らかにし、具体的な「打ち手」を実行するというものです。サッカー日本代表で例えるなら、ブラジルに勝ちたいという「ありたい姿」があるのに、現状、勝てていない「問題」がある。「原

困」は指導者なのか、トレーニングなのか、メンタルなのかと探っていくことで初めて、やるべき「課題」が明確になり、具体的な「打ち手」も見えてくる。

こうしたプロセスを飛ばして、思いつきで「課題」を設定しようとするから、おかしな「打ち手」になってしまうことが多いと考えています。

職員会議でも、さまざまな「打ち手」こそ出てきますが、表面的な議論で終わることが少なくありません。その奥にある、ありたい姿と今とのギャップは何か。そうした認識の共有から始めることで課題が明確になり、有効な打ち手も見えてくるわけですね。

「総合的な探究の時間」は これからの人生を考える機会

長江 改善活動でいえば、障がいがある方のほうが問題に気づきやすいとは思いますが。例えば、段ボール送り出し機(22ページ上)は、段ボールを取りたいのに手が届かないという車いす作業者の不便から生まれたものです。健常者の場合、無意識に中腰で取れるため、機械で補おうという発想自体が起きないのです。

ただし、障がいの有無にかかわらず、不

便に気づく人もいれば気づかない人もいます。改善につなげる人もいれば、つなげない人もいます。その違いは何か。「ありたい姿」のレベルの差ではないでしょうか。「成長したい」「こんな職場にしたい」と思えば課題感を持ち、工夫もします。一方で、「ただ時間が過ぎればいい」と思っている人は、残念ながら行動につながらないと思うのです。

——どうやら「ありたい姿」がキーワードのようですね。

酒井 確かに、進路指導の場面でも同じことが言えます。よく、「どの職に就きたいか」「どこの大学に進学したいか」と生徒に急かすケースがありますが、「自分はどうありたいか」が先にあり、そこから具体的な進路の話が出てくるというのが本来の順番ですよ。

長江 企業でもキャリアデザインなどの言葉が使われるとき、キャリア=仕事と矮小化して捉えられがちです。そうではなく、自分の人生をどう生きるかということ。ただ、そういう私ですが、恥ずかしながら学生時代、人生について深く考えたこともなければ、学校の外の世界についてもよく知りませんでした。数年前、長期の休みが取れ、40日かけて出張では行かない場所を中心に世界一周しました。

さまざまな体験や他者との関わりを
通じて、感じ、考える機会を

政治や宗教、文化など初めて知ることが多く、帰国後「取引先の方は、どんなバックグラウンドをもつのだろう」と興味が湧くようになりました。若いころにこうした経験を積んでいたら選択肢も広がっていたのではと感じます。その点、総合的な探究の時間という、普通の授業とは違う、自由な時間があるのなら、多くの体験や他者との関わりを通じて何かを感じ、考える機会にしてほしいです。

課題解決に向け自分を追い込んだ 経験が次の困難に打ち勝つ自信に

——その「総探」を組織的に進めるうえで、酒井先生は「なぜそれをするのか本質を理解し、共有することが大切。HOWではなくWHYの共有を」(17ページ)と強調されています。

長江 同感です。オムロンには「われわれの働きでわれわれの生活を向上しよりよい社会をつくりましょう」という社憲があり、どうすれば、よりよい社会をつくれるか、それこそ探究し続けてきた会社です。精神障がい者の活躍拡大など、課題は無数にありますが、酒井先生が言うように、「何のために」という点をぶらさずにいきたいです。

酒井 学校にも教育理念があり、探究の充

実も、理念を実現するための一つの方法でしかありません。私も、そこはぶらしてはならないと思っています。

——ありがとうございました。最後に、探究で培った力は、卒業後、どのように活かされたいと思いますか？

長江 難しい質問ですが、まずは、自分の動機に照らして人生を歩いていけるようになること。

次に、「私はこれを探究したい」という動機をもつようになると、多少の困難であっても、自分を追い込みながらも、解決に向かってとことん突き進むようになること。

そして、そうした体験を積むことで、次に大きな課題にぶつかったとき乗り越えていく自信になることではないでしょうか。職場だけではなく、日々の生活でも生きてくると思います。

酒井 探究やキャリア教育を通じて育まれた力やマインドが社会でこそ必要になることが実感できて嬉しいです。

長江 今度は生徒さんや先生方を連れて来てください。企業の取組を多くの人に知ってほしいし、地元の高校と接点をもてることは「よりよい社会をつくる」うえでも、大切な機会だと思っています。

社員さんに聞く「私にとって“改善”とは」

日常的な改善活動を通して、
会社だけではなく人も成長する

品質環境技術課 藤原汰智さん

私たち技術グループは、「こういうものがあれば嬉しい」という要望に基づき、障がいがある方の作業をサポートする機械や治具の開発や製作を行っています。自前で製作するためコストが抑えられ、メンテナンスのポイントもわかります。完成して「使ってください」で終わりではなく、現場で機能しているか確認しながら改善を加えています。私が卒業した高専では、自分で課題を見つけ改善していく探究的な授業が充実していました。技術云々よりも、そういう考え方が体に染み込んだことが今につながっていると思います。同じことをしていても課題感をもつ人と、そうでない人がいます。理想を高くもつ人は、不便と感じたことを改善しようとするのに対して、現状で満足している人はそうはなりません。その点、徹底3S活動は会社だけではなく、人を成長させるものだと思います。

改善できることはないか、
常に周囲に気を配る日々

太陽の家 制御機器科 田中大樹さん

もともと手先が器用で、中学校の技術の授業でハンダゴテを習ったことがきっかけで、技術に関わる仕事に就きたいと思いました。工場では、「改善できることはないか」「車いす作業員にとって不便はないか」など、絶えずアンテナを張っていますし、「こうしたものがあればいいのに」といった要望があれば、どうしたら応えられるか考えるようにしています。例えば、工場内には緊急時に赤く光る回転灯がありますが、関係のない別のラインの作業員から「まぶしい」という不満があがっていました。そこで、必要な方向以外は光を遮断するカバーを自作したところ、思った以上に喜ばれました。私生活でも、以前、自転車でヒヤッとした経験をきっかけに、今の私の自転車は、ウィンカーやブレーキライトが光るように改良しています。

探究は社会で本当に生きるのか？

自ら 「問い」を抱いて 働く4人

高校時代の探究の学びは、社会で働くときに本当に必要なのでしょうか。
自ら探究のある働き方をし自分らしいキャリアを歩んでいる、
「公務員」「店舗経営者」「人事担当者」「エンジニア」の
4人の話から探っていきます。

取材・文／藤崎雅子 イラスト／加納徳博

＼ 私の問い 1 /



地域資源を生かして産業を盛り上げ
故郷を持続可能にするには？

(静岡県西伊豆町役場公務員 松浦城太郎さん)

＼ 私の問い 2 /



障がいがあっても、地域とつながって
生きる環境をどうつくる？

(コーヒー焙煎処「縁の木」白羽玲子さん)

＼ 私の問い 3 /



求める人材を採用し、会社経営を
“人”の面から支えるには？

(株式会社ギフティ 人事 大川真喜子さん)

＼ 私の問い 4 /



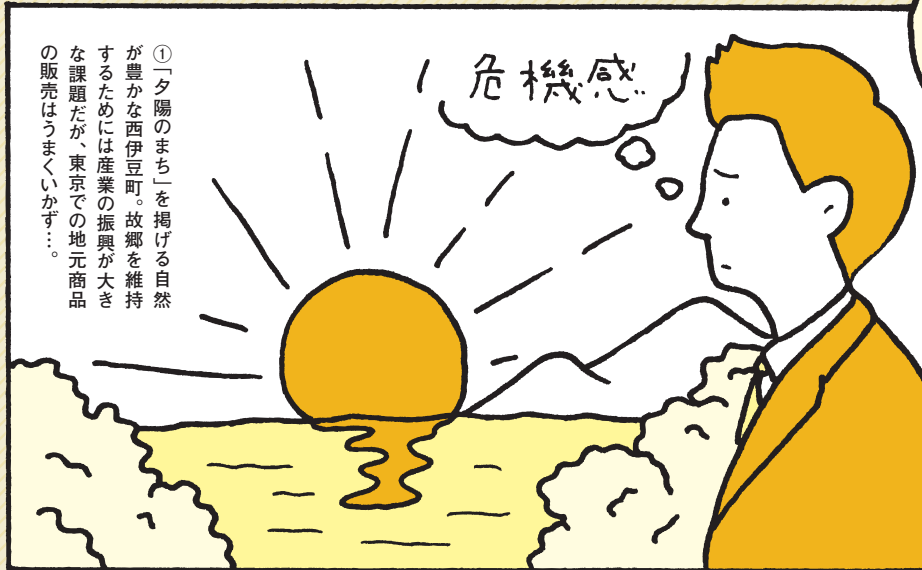
目が不自由な人を含めた
多様なユーザーが使いやすいシステムとは？

(フリー株式会社エンジニア 櫻井拓也さん)

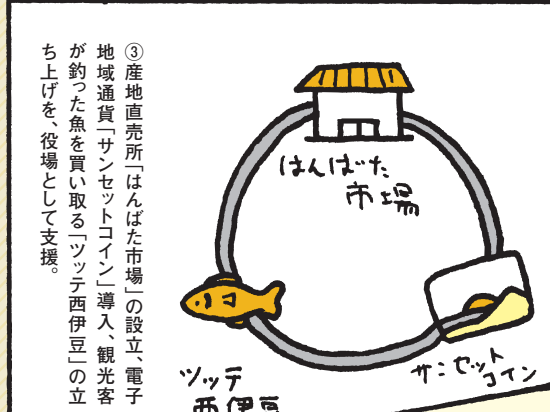


地域資源を活かして産業を盛り上げ
ふるさとを持続可能にするには？

静岡県
西伊豆町役場
公務員
松浦城太郎さん



①「夕陽のまち」を掲げる自然が豊かな西伊豆町。故郷を維持するためには産業の振興が大きな課題だが、東京での地元商品の販売はうまくいかず…。



③産地直売所「はんばた市場」の設立、電子地域通貨「サンセットコイン」導入、観光客が釣った魚を買い取る「ツッテ西伊豆」の立ち上げを、役場として支援。



②漁業や農業の現場に出て生産者から困りごとや意見を聞く一方で、地域外のアイデアやスキルにもアンテナを張り、マッチングを模索。



④3施策が順次スタート。地産地消が進み、はんばた市場での販売は生産者のやりがいにもつながっている。

人口減少、産業衰退…町の存続に強い危機感

私が生まれ育った西伊豆町は、海も山もある自然豊かなところ。海に沈む夕陽の美しさは日本一だと自負しています。大学卒業後、そんな町の役場職員となり、現在は産業振興を担当しています。



地域資源を生かして産業を盛り上げ
故郷を持続可能にするには？

(静岡県西伊豆町役場公務員 松浦城太郎さん)

町ではかつて漁業が盛んでしたが、高度経済成長期以降は観光業が主要産業となりました。しかし、現在はその勢いも衰え、著しい人口減少がさまざまな産業の衰退に追い打ちをかけている状況です。果たして自分の子どもは将来この町で暮らしていけるだろうか、強い危機感をもっています。大切なふるさとを消滅させたくない。その思いが、今の仕事の大きな原動力です。

地産地消を提唱。生産者主導の推進を支援

数年前、地元の商品の販路拡大のため、東京のアンテナショップでの販売に挑戦したのですが、パッケージデザインや内容量がお客様のニーズに合わず、思うような収益を上げられませんでした。そこで、商品を都会に持って行く“地産外商”ではなく、町に観光客を呼び込んで商品を買ってもらう“地産地消”へと、大きく舵を切ることになりました。

ヒントになったのは、農業生産者の方との会話です。「自分たちが作ったものを直接売れる場所が欲しいよね」。当時、町に直売所はありませんでした。漁業者や水産加工業者の方にも聞いてみるとやはり同じ意見で、「これはいけるかも!」と。さっそく、幅広い分野から賛同者を集め、直売所設立準備会を立ち上げました。役場は事務局として公平性の担保や意見調整に努めながら、直売所のノウハウをもつ外部アドバイザーにも入ってもらい、生産者の方々が中心となって準備。2020年、浜辺を意味する方言から「はんばた市場」と名づけた産地直売所がオープンしました。

直売所設立と同時に進めていたプロジェクトが、もう2つあります。その1つは電子地域通貨「サンセットコイン」の導入です。発端はマイナポイント事業^{*}でした。キャッシュレス決済が浸透していない町にとっては、町民のお金が町外に流出する危機です。高齢者や子どももマイナポイントを受け取り町内での買い物に使えるよう、新たな仕組みが必要だと考えました。調べてみると、すぐに使えるようなシステムがあることが判明。「こ

*マイナバーカードを作るとマイナポイントがもらえるという国の事業





地域資源を生かして産業を盛り上げ
故郷を持続可能にするには？

(静岡県西伊豆町役場公務員 松浦城太郎さん)

「これは絶対やらねば」と上司を口説き、財政課に頭を下げて急遽費用を捻出してもらい、20年のマイナポイント事業開始前にサンセットコインを稼働させることができました。

もう1つのプロジェクトは、観光客などが余分に釣った魚を買い取る仕組み「ツッテ西伊豆」の立ち上げです。元となった仕組みを他地域で実践していた方と出会い、その手法を聞いた時、全身に電流が走るような衝撃を受けました。「ぜひうちでもやりたい」とすぐさま町の遊漁船組合代表に掛け合い、地域ぐるみで立ち上げました。観光客は提携する釣り舟で釣りを楽しみ、釣りすぎた魚をはんばた市場に持ち込んでサンセットコインと交換、コインを加盟店で買物や食事に使うことができます。ばらばらに始めた3つの施策が、結果的につながったのです。



海の近くに建つはんばた市場。新鮮な海産物、季節の野菜や果物、鰹節や塩辛などの加工食品が並ぶ。



電子地域通貨サンセットコインのカード。カード型とスマホのアプリ型と2種類の利用方法がある。



ツッテ西伊豆によって、釣り人は町の魅力を一層堪能でき、地域の漁師不足解消にもつながる。



地域資源を生かして産業を盛り上げ
故郷を持続可能にするには？

(静岡県西伊豆町役場公務員 松浦城太郎さん)

サンセットコインの流通量は年々増加し、23年度は初年度の7倍となる16.8億円に。ツッテ西伊豆は、そのユニークな手法がマスコミで紹介されることで町の宣伝になっています。また、はんばた市場の何よりの成果は、消費者と接する機会があまりなかった生産者の方々が、店頭で直接「おいしい」などお褒めの声をもらい、いきいきとした表情を見せていることです。

海の魅力を活用して観光や移住を促進

現場を回っていると、「これに困っている」「あれを何とかせい」とあちこちから声がかかります。地域の課題はその辺にごろごろ転がっているのです。その解決は、地域の力ではどうにもならないこともあります。一方で、地域外には面白いアイデアやスキルをもち活躍の場を求めている人が数多くいることが、東京進出を経験してわかってきました。そこをうまくマッチングし、地域課題の解決につなげることが、私たち役場の大事な仕事。自らが“プレイヤー”にならなくても、課題解決に貢献できることは、私の大きな喜びです。

今後、海に関する資源を漁業以外にも活かして地域のにぎわいや所得、雇用を生み出していきたいと考えています。海の魅力って、すごく大きいんです。これを別の分野と組み合わせれば、もっと面白いことに発展するかもしれない。その先にきっと町の未来があると信じています。



まつうら・じょうたろう ● 西伊豆町で生まれ3歳から釣りを楽しむ。東海大学海洋学部卒業後、西伊豆町役場に入庁。現在、産業振興課農林水産係係長、兼、漁師。

探究へのヒント

「なぜ？」をもち続けよう

私は知りたがりで、「なぜ?なぜ?」と質問して大人を困らせる子どもでした。そんなふうに興味をもって深く知ろうとする心は、今、地域課題を掘り下げて解決の可能性を広げることに非常に役立っています。「なぜ?」を問う姿勢は、ずっと捨てずにもち続けたいですね。

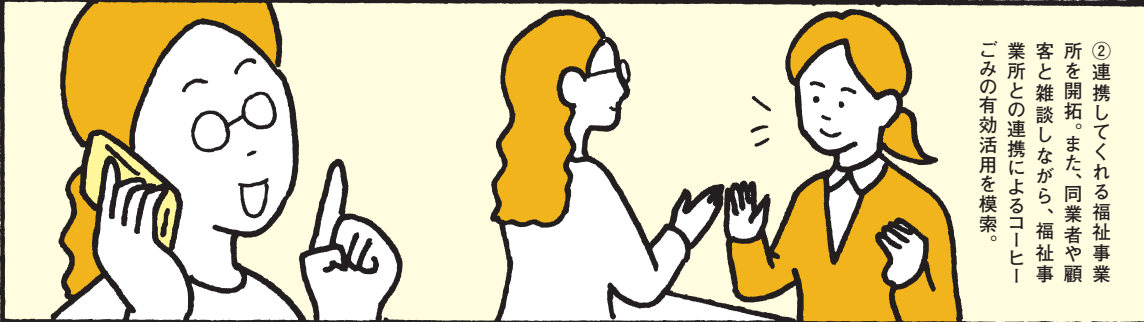


障がいがあっても、地域とつながって生きる環境をどうつくる？

珈琲焙煎処「縁の木」代表
白羽玲子さん



①次男が知的障がいを伴う自閉症と診断され、親亡き後も地域と関わりながら働ける場をつくろうと決意。会社員を辞めてコーヒー豆焙煎店を開業。



②連携してくれる福祉事業所を開拓。また、同業者や顧客と雑談しながら、福祉事業所との連携によるコーヒーごみの有効活用を模索。



④地域めぐりイベントを立ち上げ、地域の個人がつながる地域づくりにも挑戦中。



③地域において障がい者が回収した資源を別の製品にアップサイクル※する「KURAMAEモデル」を構築。さまざまな製品づくりに応用。

※本来は捨てられるはずの製品に新たな価値を与えて再生すること

親亡き後のわが子を思い地元でコーヒー焙煎店を開業

10年前、出版社の営業職から転身し、住まいのある東京・蔵前でコーヒー豆焙煎店「縁の木」をオープンしました。

きっかけは、次男が知的障がいを伴う自閉症と診断されたことです。



障がいがあっても、地域とつながって
生きる環境をどうつくる？

(コーヒー焙煎処「縁の木」白羽玲子さん)

いつかくる親亡き後、わが子はどんな生活を送ることになるのか。調べてみると、知的障がい者の仕事の選択肢は非常に少なく、地域社会からの距離を感じました。もっと地域社会の中に多様な仕事の選択肢をつくれなかと、検討してたどり着いたのが、コーヒー豆焙煎店でした。安定的な作業の質が求められる仕事は、障がい者の特性として合う人も多いだろうと思ったのです。

そうして縁の木を創業し、コーヒー豆を焙煎して実店舗とオンラインで販売する事業を始めました。知的障がいのある福祉事業所利用者が作る菓子類などの製品を仕入れ、コーヒーとのセット販売も行っています。最初から福祉事業所と連携すると決めていたのですが、実績のない株式会社からの“飛び込み営業”は警戒され、当初は全国約50カ所にお声掛けして、契約成立はわずか2カ所。その後も地道なアプローチを続け、現在は15カ所に増えました。

障がい者の新たな仕事を生む地域資源循環モデルを構築

創業から5年目ごろ、新たな事業に乗り出しました。コーヒーは焙煎や抽出の過程で大量のごみが出ます。それをただ捨てるのはもったいない。



古くから製造と卸の集積地として栄えた東京都台東区蔵前に店を構える「縁の木」。



障がいのある福祉事業所利用者が地域の店舗を回って、従来ごみとして捨てられていた資源を回収。



障がいがあっても、地域とつながって
生きる環境をどうつくる？

(コーヒー焙煎処「緑の木」白羽玲子さん)

福祉事業所と連携してアップサイクルできないだろうか。近所の同業者やカフェ経営者、お客様との雑談のなかでそんなアイデアを語ってみると、興味をもってくれる人は意外と多く、コーヒーかすからたい肥を作れるメーカーを紹介してくれる人が出てきたんです。そこから、福祉事業所の利用者さんが地域の焙煎店やカフェを回ってコーヒーごみを回収し、それをメーカーにてたい肥にするというアップサイクルが実現しました。



緑の木の事務所では、KURAMAEモデルによって誕生したさまざまなアップサイクル商品が販売されている。

この仕組みはさまざまなアップサイクルに応用可能です。これに「KURAMAEモデル」と名づけて、地域で協力の輪を広げていきました。また、SNSを活用し、活動を発信するとともに、興味をもってもらえそうな企業・団体や個人を見つけて話しかけ、連携先を開拓。これまで、サンドイッチ店の余ったパンの耳からクラフトビールへ、コーヒーの欠点豆からタンブラーへ、不要になったコーヒー豆袋からトートバッグへ…などバラエティーに富んだアップサイクルが実現しています。最近では、学校給食を含む地域のごみを集めてたい肥を作り、それを使って地域の空き地や屋上庭園で栽培したハーブから、ハーブソルトやハーブティ、ポタニカルビールなどを作ろうと、実験と失敗を繰り返しながら挑戦しています。

いずれもそのプロセスにおいて、福祉事業所が関わります。屋内作業が多い福祉事業所の利用者さんが地域の人と関わる機会になり、工賃アップにつながることで、KURAMAEモデルの大事なポイントなのです。

雑談から次々生まれた地域をつなぐアイデアと実践

KURAMAEモデルの事業は、アップサイクルに取り組みたい企業に対する企画・設計や運用の手数料で成り立っていますが、これがびっく



障がいがあっても、地域とつながって
生きる環境をどうつくる？

(コーヒー焙煎処「縁の木」白羽玲子さん)

りするほど儲からない(笑)。コロナ禍が長引いてコーヒーの売上が落ち込んだときは、本業に集中すべきではないかと悩んだりもしました。それでも今は、やってきて良かったと、心から思います。

資源回収を担う福祉事業所の利用者さんが、そこからできた商品を指して「俺の〇〇だ」と誇らしげに言っていたり。障がいや高齢などの困難を抱えている方に、「少し社会と関わってみるのもいいのでは」という雰囲気が出てきたり…。「わが子のために」と始めた取組が、ちょっとでも地域みんなの役に立っているのなら、こんな人生も楽しいじゃないかと思えてきます。

実は私、あまり独創性がないんです。ただ雑談のなかで「こうありたいよね」「こういうことできたらすごいね」と心の声を洩らしているだけ。すると、誰かが興味をもってくれ、ご縁をもたらしてくれる。最近では、「これやってみない?」といろんな話が舞い込むようにもなりました。

一昨年、縁の木が発起人となり、商店街に後援いただいて、サステイナブルな取組をしている店舗や企業、施設をめぐる「下町そぞろめぐり」というスタンプラリーイベントを立ち上げました。KURAMAEモデルは事業者中心の取組ですが、これは住民の皆さんが直接参加するものです。コロナ禍で出歩く機会が減って地域の道やお店を知らない子どもも増えていますが、楽しく巡りながらお店の思いや優しさに触れてくれたら嬉しいですね。

さて次は何をするか。私にもわかりません(笑)。頂いたご縁を大切に、縁の木の思いに外れないことを着実にやり続けるのみです。

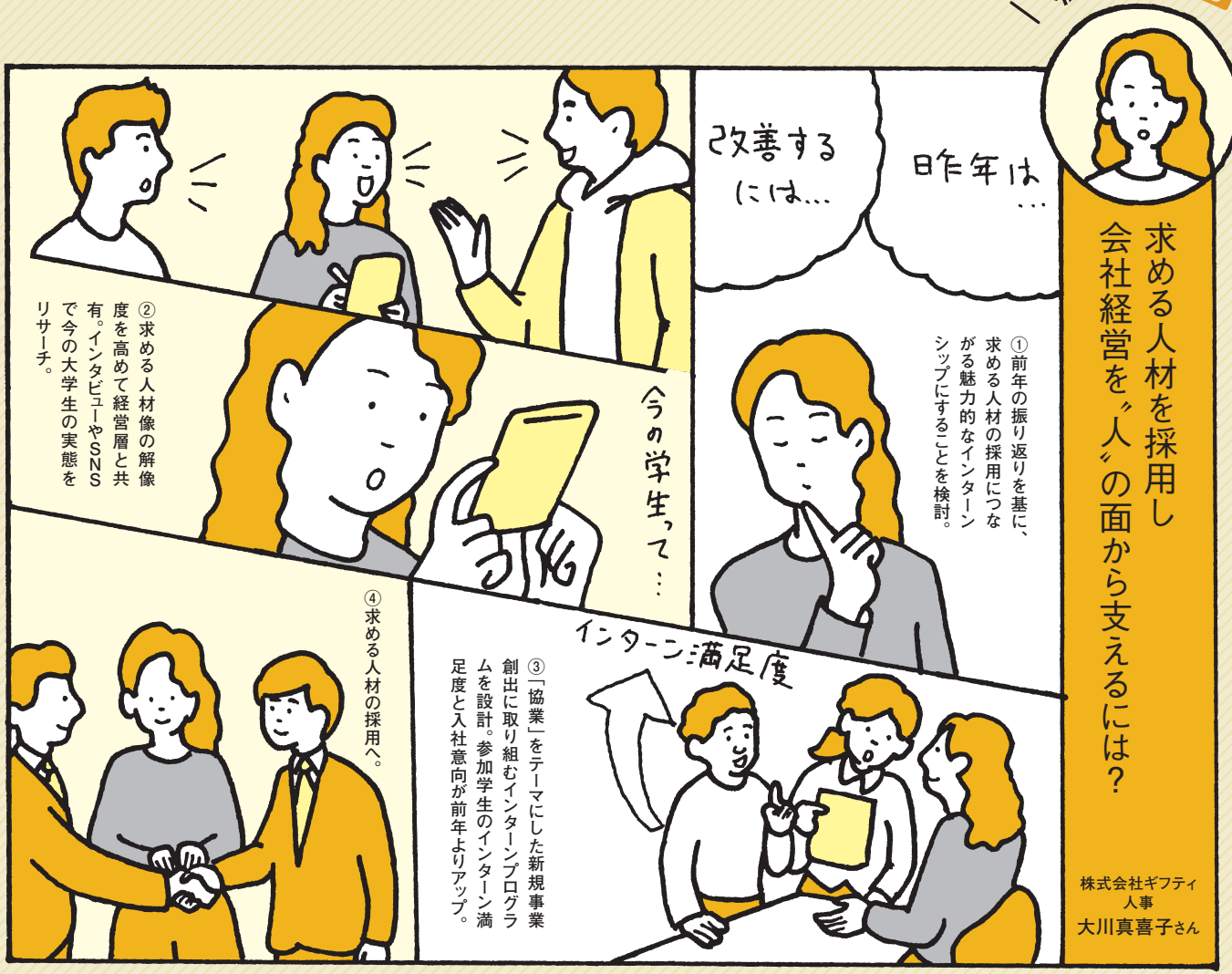


しらは・れいこ ● 株式会社縁の木代表。一般企業の営業を経て、2014年に起業し、珈琲焙煎処「縁の木」をオープン。2019年より地域循環「KURAMAEモデル」を主宰。

探究へのヒント

多様な価値観に気づく経験を

自分が今もつ価値観が必ずしも正しいとは限りません。いろんな人に話を聞いて、自分の考えも恐れずに話してみる。苦手だと思うことも、とりあえずやってみる。すると、自分が見えていなかった世界に気づくことができるでしょう。そんな経験を高校時代にたくさんしてほしいですね。



前年の反省を踏まえて学生の実態を徹底リサーチ

前職での経験を活かして、2020年、eギフトプラットフォーム事業を展開する株式会社ギフトイに、人事担当として入社しました。“人”に関わる仕事にやりがいを感じています。

現在、新卒採用の戦略立案から実施まで担っています。採用活動は毎年同じやり方ではありません。例えば、大学生に仕事体験を通じて会社理解を深めてもらうインターンシップ。昨年は夏のインターンから採用につなげられなかったことから、自分の経験や感覚に頼り過ぎていたと考え、やり方を見直しました。まず、当社が求める人材像を明確化して経営層と共有。そうした学生にとって魅力的なインターンにするため、現在の大学生の流行や生活、就活の実態をインタビューやSNSやで徹



求める人材を採用し、会社経営を
“人”の面から支えるには？

(株式会社ギフト 人事 大川真喜子さん)



2024年の入社式で、自らが採用に関わった新入社員に向けて話す大川さん。

底的に探り、他社のインターンもリサーチしたうえで差別化を模索しました。夏のインターンでは例年、新規事業を考えるという3日間のワークショップを行います。今年は実際の当社の顧客企業6社に協力を仰ぎ、「協業」をテーマに設定。学生は企業の資産・強みを組み合わせて新規事業を考え、実際に顧客企業を訪問して協業提案し、最後は当社の代表陣に学生が提案を行い講評してもらうという、非常にハイレベルな内容で実施しました。

参加者の感想で目立ったのは「楽しかった」より「厳しかった」。狙いどおりの反応です。ビジネスのリアルを感じ、厳しさも知ったうえで当社の選考を受けたいという学生が多数いました。当社で働いてくれる日が楽しみです。

職場で、自分が採用に携わった社員が周囲に良い影響を与えている様子を見ると、嬉しくなります。これからも魅力的な仲間を増やしていけるよう、橋渡しをしていけたらと思います。



おおかわ・まきこ ●証券会社、人材サービス会社を経て、2020年株式会社ギフトに入社。新卒のビジネス職の採用を担当し戦略立案から実行まで担っている。

探究へのヒント

自ら挑戦して学んで、楽しい!

仕事では、何をやるか、どうやるか、すべて自分次第。難しい課題に挑めば失敗も成功もありますが、そのすべての経験が自分を高める学びです。そんな学びの楽しさを、高校時代から知ってほしいですね。



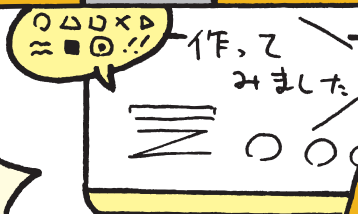


目が不自由な人を含めた
多様なユーザーが使いやすいシステムとは？

フリー株式会社
エンジニア
櫻井拓也さん

① 社内研修でアクセシビリティ^{※1}の重要性を学ぶ。自社サービスのアクセシビリティ向上の余地に気づき、興味がわく。

② 自分のやりたい開発ができる制度を活用し、自社サービスの音声読み上げ機能の充実に取り組む。



③ 試作品を作成し、社内目の不自由なスタッフに意見を聞くなどしてブラッシュアップ。

④ 開発した機能を自社サービスに実装。会社が提供した価値と、自分の技術的な好奇心のどちらも満たすことに成功。



※1 年齢、性別、利用環境、障がいの有無などの違いによらない利用しやすさ

「とりあえずやってみる!」で好奇心と社会的価値を両立

小学生のころから“遊び”でプログラミングをしていました。好きなことを深めようと工学情報系の大学・大学院で学び、3年前、スモールビジネスをサポートするサービスを提供する会社に入社。現在、確定申告システムのエンジニアとして働いています。

学生時代は技術そのものへの興味が強かったのですが、働き始めて、「ユーザーのためになることは？」を強く意識するようになりました。ユーザーにとっての本質的な価値を追求する、会社のカルチャーにも共感しています。

ある時、社内研修でアクセシビリティの重要性を学び、目の不自由な人の使い勝手を考えるようになりました。担当システムを調べてみると、音声読み上げ機能はあるものの、技術的に困難で未対応の箇所も。そ



目が不自由な人を含めた
多様なユーザーが使いやすいシステムとは？

(フリー株式会社エンジニア 櫻井拓也さん)



櫻井さんはチーム内外でのコミュニケーションを「面白い連携を生むきっかけにもなる」と大切にしている。

れに対応することが自分自身のテーマになりました。

チームで設定した課題ではないので、日常業務とは別に自分のやりたい開発ができる制度^{※2}を使って、少しずつ開発に取り組みました。具体的なものがあると話が早いと思い、まずプロトタイプを制作。チームに共有して意見をもらったり、社内の目の不自由なスタッフに試してもらったりしてブラッシュアップを重ね、今年1月、システムへの実装が叶いました。使った方がSNSで感動の声を上げるなど、嬉しい反響を頂いています。

多様なユーザーが使いやすいよう改善することで、会社の提供する価値を高め、同時に自分の技術的な興味関心も満たされます。他社にない新しい機能には特にやりがいを感じますね。

今後も好奇心を大切に、そのとき一番面白いと感じることをやっていきたい。そこから自ずと進む方向が見えてくるのだと思います。

※2 フリーには、普段の業務から離れて、自分の興味関心や目標に基づいて取り組む「開発合宿」や「G20」(勤務時間の20%を自分のやりたいプロジェクトに費やすという意味)といった制度がある。



さくらい・たくや ● 大学院を卒業後、2022年、フリー株式会社に入社。会計申告開発本部 財務会計部 個人チームにて個人事業主向けプロダクトの開発を担当。

探究へのヒント

学んだことで、遊ぼう

遊ぶ感覚で面白いプラスαをしようとレポート等に取り組んでいたことが、「言われたことをやるだけ」ではない仕事の仕方につながっています。興味あることを学び、学んだことで思い切り遊ぶことが大切です。

全国14校の実践事例からご紹介

探究のお悩み

Q & A

各学校の先生方が考案され、実践されている取組や方針をご紹介します。
御校で探究に取り組まれる際のヒントとしてご覧いただければと思います。

学校外との
ネットワークづくり、
難しい...

探究にかけられる
予算や人材、
どうしてる？

教員間で意識や
知識の差が
大きくて...

評価のつけ方、
ずっと模索して
います...

自分が習ったことない
「探究」、どうサポート
したらいい？

どうしたら在り方・
生き方や進路に
つながる？

探究の
「具体的な価値」が
まだ見えなくて...

取材・文／松井大助、笹原風花

テーマ 学校外連携

Q

学校外とのネットワークづくり、難しい…

A

セミナー等に参加し、新たな連携先を開拓しています。

加古川東高校（兵庫・県立） 教育企画部 SSH主任：理数科長 新 友一郎先生、同 STEAM担当：谷口正明先生

理

数科の課題研究、普通科の探究に加え、2020年度から夏休み
に希望選択制・学科学年不問の

「STEAM特別講座」をスタートさせました。
「ワクワクする好奇心から新しい知を創出す

る」をキャッチフレーズに、行政、企業、大学・
学校、卒業生らと連携し、現在は20あまりの
多彩な講座※を設けています。

外部連携が進むきっかけになったのは、初
年度のSTEAM特別講座の一つ「加古川市

Q 学校外とのネットワークづくり、難しい…

の地域デザインを考える」でした。生徒たちがどんどん主体的に動き出し、加古川市長らの前でプレゼンをするほどに活動が盛り上がったんです。それをきっかけに、行政や民間企業とのつながりができ、そこからのご紹介などで連携先が芽づる式に増えていきました。特に中国銀行は、本校のニーズに合わせて自社の取引先をつないでくださるなど、ハブ的な存在となっています。また、新たな連携先を開拓すべく、担当教員が学会やセミナーなどに積極的に足を運んでいます。登壇者や参加者らとその場で名刺を交換し、後日、メールで教育活動への協力を依頼すると、多くの場合は快く引き受けてもらえます。

外部との連携の際に心がけているのが、本校としての目標ややりたいことを伝えて理解してもらうこと、そして、最初はスポット的に依頼してうまくいきそうかを試すことです。連携してどうしたいのかが曖昧、相手に丸投げ…

ではうまくいきませんし、相性もあります。事前に打ち合わせを重ねて、こちらの希望と相手ができることをすり合わせ、生徒にしっかりと伝わる方法を教員が考えることも大事だと感じています。

大人の話の聞いたり大人と議論したりすることで、生徒の世界は大きく広がり、社会性や主体性が育まれることを肌で感じています。教員にとっても外部との協働は刺激的で得るものも多くありますし、何よりも楽しいんですよ。課題は、外部連携を持続可能な取組にすること。そのために、CSR(企業の社会的責任)や広報的な部分で連携先にとってもメリットがあるWin-Winの関係構築と、担当教員に異動があっても取組が引き継がれるような内部共有を心がけています。

※2023年度のSTEAM特別講座と連携先の一例：「画像認識で世の中はこう変わる!～画像認識研究の最前線～/兵庫県立大学」「日本語学校で海外留学生と交流しよう/KIJ語学院」「Premiere Proで動画作成!/神戸大学学生(卒業生)」「データベースで政策提言しよう(地域デザイン)/加古川市」「かがくえほんを創ろう/アトリエPetata」「起業家ワークショップ～稼ぐ力が身に付く起業～/(株)ROX」「電子工作×micro:bit/京都大学学生(卒業生)」「動物骨の構造を見てみよう!!/九州大学学生(卒業生)」

探究活動の全体の流れ

第1期(2006年度～)から継続してSSHに指定され、今年度、第IV期3年目を迎える。第IV期は、「新しいことに挑戦して探究するための資質・能力を、“全ての教育活動”で育成する」を目標に掲げ、探究を軸に、全教科の通常授業でベーシックスキル(発表、課題発

見、データ分析、思考力等)を育成することに取り組んでいる。STEAM特別講座からスタートした外部との連携は、理数科の課題研究や普通科の探究のシーンまで広がり、2024年度は16の企業や自治体、大学・学校などと連携している。

Q 学校外とのネットワークづくり、難しい…

A 地域協議会が大きな力となって、地域で生徒を育てています。

串本古座高校（和歌山・県立） 未来創造委員会委員長：高須 崇先生

2

2016年度に「串本古座高校魅力化プロジェクト」として学校改革をスタート。「学校内や教員だけでは育てきれない部分がある」「地域の生産人口が減少し、地場産業が衰退している」という課題感から、自然、文化・歴史、地場産業、地域人材といった地域の資源を活用し、生徒が地域で学ぶ、そして、ゆくゆくは地域に貢献できる人材に育つ…という「地域まるごとキャンパス構想」を立ち上げました。並行して、本校の校長が串本町と古座川町の町長にはたらきかけ、魅力ある学校づくりのために三者が連携・協力することが約束され、「串本古座高校地域協議会」が設置されました。こ

の地域協議会の存在が、外部連携の要となっていました。

具体的には、地域協議会が商工会、行政、地域の事業者・住民などに対して高校の教育活動への支援や協力を依頼し、地域まるごとキャンパス構想に基づく学校設定科目（紀伊半島探究、南紀食文化探究、ジオパーク学、水産生物探究、マリンスポーツなど）の特別非常勤講師を務めていただきました。例えば、地元のダイビング協会の方に協力していただき、学校のプールで実習をしたうえで実際に海に潜ってライセンスをとる…ということもやりました。力を貸してくださった方の人数は、2018年度にはのべ300人近くに上り、こう



ラムサール条約に登録された世界最北の大サンゴ群生域にて、ダイビングを体験する生徒たち（学校設定科目「マリンスポーツ」）。



南紀熊野ジオパークで行われた、特別非常勤講師によるフィールドワークの様子（学校設定科目「ジオパーク学」）。

Q 学校外とのネットワークづくり、難しい…

した外部とのつながりは本校で取り組んでい
る探究活動にも引き継がれていきました。

地域と学校をつなぐうえで重要な役割を果
たしているのが、地域協議会から派遣され校
内に常駐する地域支援コーディネーターです。
科目ごとに、学年主任や管理職、教務らも参
加する担当者会議を毎月開催し、教職員とコ
ーディネーターと一緒に授業をつくっています。
コーディネーターは、育てたい生徒像や身に
つけてほしい力、教員・生徒や科目のニーズ
を深く理解し、それに応じた地域人材とつな
いでくれます。実際に地域の方に協力をお願
いすると、地域の未来を担う高校生のためな
らと、ひと手間かけることを厭わない方がほと
んど。力を貸したいと思っている人、見守っ
てくれる人は、実は地域にたくさんいる。こち
らからアプローチして思いを伝えることが大事
なんだと実感しています。

これまでの探究活動では、生徒の興味・
関心に応じて、それに見合った方をコーデ
ィネーターが紹介してくれるケースが中心でした。
今後は、生徒が自らアポイントメントをとって出
向くつながり方を強化したいと考えています。
地域で育ってきた子どもたちなので、こちらが
思っている以上に、地域の人のことを知って
いたり、つながりがあったりするんです。生徒
は失敗もするでしょうが、失敗からこそ学んで
ほしいし、失敗を恐れずに動きながらブラッシ
ュアップしてほしいと思っています。生
徒が思い切って踏み出せるためには、生徒
の無礼や失敗も含めて包み込んでくれる地域、
一緒に生徒を育てようとしてくれる地域にして
いかなければなりません。その手助けをしてく
れるのが地域協議会であり、本地域ではそこ
がうまく機能しているのだと感じています。

探究活動の全体の流れ

串本古座高校魅力化プロジェクトの始動
以来、「グローバルコース」を中心に地域と連
携した探究的な教育活動を実践。探究のコ
ンセプトは「夢を語れる18歳の育成」。地域
をまるごと学びのフィールドとし、3年間を通し
て段階的に自分の未来を切り拓いていく。1
年次には、自分のあり方や生き方を深めなが
ら「自分の夢」について考え、2年次は「地域

の素材を活かして新たな価値を創造せよ」、
3年次は「自らの探究的な学びを地域に還
元せよ」というミッションのもとそれぞれのプロ
ジェクトに取り組む。2024年度に普通科を
「未来創造学科」に改編し、全国初の「宇宙
探究コース」のほか「文理探究コース」「地
域探究コース」を設置した。



探究にかけられる予算や人材、どうしてる？

A

培ってきた財産を眠らせずより活かそうとしています。

新潟南高校（新潟・県立） 校長：横堀真弓先生

昨

年度の探究で重視したのが「持続可能性」です。本校は2003年のSSH校指定以来、探究的な学びを進めてきましたが、第V期SSHの採択は叶わず、2年間の経過措置となり、予算が減少。それでも、探究の継続・発展を目指しているからです。

まず先生方が「お金をかける前に眠っている資料や道具を活かす」取組を始めてくれました。各所でバラバラに管理されていた資料や道具等を理科室倉庫に集約、全員で把握して有効活用できるようにしたのです。

本校では探究の一環で海外研修—台湾の高校との共同研究も行っており、現地視察や帯同にもお金がかかります。その費用の一部

は、PTAに後援会費をお願いし充当しました。加えて、相手校と関係性ができたからこそ、オンラインの交流や、台湾の生徒の訪日の歓待など、限られた予算のなかでもできる活動を広げています。

また、先生方がSSHの蓄積を基に「教科授業でも探究場面を作る」ことに努めています。探究担当を短いサイクルで回せるよう、業務を可視化する、ネット上のnoteに活動を記録するなど、教員が入れ替わっても続く体制も志向。特別な予算や人に頼らなくても、探究は持続でき、その学びが生徒の自主性を育てていく。そうしたモデルを確立し、SSH校以外にも輪を広げることが、先駆けて探究に取り組んだ本校の使命だと思っています。

探究活動の全体の流れ

データ活用をもとに、1学年で社会課題解決を目指す探究を行い、理数コースの生徒は学校設定科目で課題研究にも挑戦。2～3学年で生徒全員が課題研究を行う。新潟

市や県内大学、地元企業とも連携。協働する企業に資金面の後援もお願いできないか相談するなど、持続可能な探究にするための手立てを多方面から模索している。



Q 探究にかけられる予算や人材、どうしてる？

A やりたいことを各方面に発信、助力を得てきました。

坂下高校（岐阜・県立） 校長：田並千穂先生

咲

明日（さかした）高校マルシェという、地域の企業・団体・クリエイターと生徒が協働するマルシェ（市場）を、2022年度から校内で開催しています。文化祭とは別に、地域の皆様の飲食や物販の出展から生徒の探究実践まで行う催しです。探究の予算を教職員で共有し、補えない資金の捻出を検討。警備スタッフや広報用ポスターの費用は同窓会に協力を仰ぎ、生徒の菓子販売等の材料費は学校徴収金の積立から一度出し、売上を戻してやりくりしました。地域の皆様には、マルシェの商いを各自の裁量にお任せすることで、謝礼等はお支払いせずご協力いただいています。

若手の教員たちが発案し、その熱量に皆が巻き込まれた取組。前校長と、当時教頭の私はその経緯がすごく嬉しくて。本当にで

きるか懸念もありましたが、覚悟を決め、学校事務の方に規定にふれる面がないか県との調整もお願いして進めました。生徒たちが教育委員会や地域に出向いて直接協力を仰ぐことで、多様な方々に応援団になっていただきマルシェの成功につながりました。

探究全体では、互いの目的のために取組によっては無償で協働できる方との連携も、人づてをたどって広げています。まちの課題を共に考えてくださる市役所、高大連携協定を結んだ大学、地域貢献への情熱から生徒と協働で商品開発をしてくださる企業の方などです。

探究活動の全体の流れ

1年次に地域の人々へのインタビューや、地元で販売する商品開発に挑戦。2～3年次は観光・食・保育など興味ごとに縦割りグループでゼミ活動。秋には体育館とその外

周で「咲明日高校マルシェ」を行う。「教育助成事業」にも目を向けていて、同校はマルシェの取組を論文にして日教弘教育賞に応募、最優秀賞を獲得し、資金助成も得た。



教員間で意識や知識の差が大きくて…

A

「面白さ」を共有しながら引き継ぎ・分担しています。

馬頭高校（栃木・県立） なかがわ 那珂川学担当：小高圭美先生

那

那珂川学という、本校のある那珂川町を舞台とする探究学習を始めたのは9年前。協力して下さる地域の人を探してはつながり、形にしました。その過程で、町には生徒の学びの資源がたくさんあると実感し、ぜひ続けたいと思うように。ただ、その計画と実行はやはり大変で、この先も関わる教員が毎年ゼロから始めるなら、負担が重すぎるとも感じました。だから、教員間の引き継ぎを意識するようになったのです。

立ち上げた地域連携の取組については「どういう取組で」「地域の誰に相談すればよいか」がわかる一覧を作り続けています。地域関係者との打ち合わせには、ほかの先生にも

同席してもらっています。私が魅了された町のヒト・モノ・コトを「こういうの知っています?」と先生方に発信もしています。ほかの先生にもこの町を「面白い」とまずは感じてもらい、ご自身から関わりを深めていただけるように。探究の取組は「義務感でやる」ことになると、途端に辛くなりますから。

私の異動後も全体を把握している人がいるように、連携する町役場の方と交渉し、町として地域コーディネーターも雇っていただきました。探究学習の発表を、町との合同開催にできないか相談し、来賓との連絡調整や会場準備でお力添えいただくなど、業務の分担も目指しています。

探究活動の全体の流れ

1年次に生徒が地域に出てヒト・モノ・コトにふれる。2年次にその体験も踏まえ、取り組みたい地域課題を設定、現地調査を行う。同校は卒業後に地元就職する生徒が多

いが、探究によって就職先のほかにも地域との関わりをもてる卒業生が増え、「社会に参画する土壌が豊かになった」と小高先生は感じているという。



Q 教員間で意識や知識の差が大きくて…

A 方向性や困りごとを研修等で共有しています。

熊本北高校（熊本・県立） SSH研究部 部長：前田敏和先生、副部長：川口祐樹先生

課

課題研究による探究の推進に当たり、ワークショップ型の職員研修をくり返してきました。「目指す生徒像」「評価のあり方」「生徒への問いかけや関わり方」等を教員同士で話し合い、意識の共有を図っています。講義型の研修でやり方を伝授するというより、皆でアイデアを共有していく形の研修をすると、意見交換のなかにも個々の教員の強みが発揮され、主体的に探究に関わることができるように思います。現在も研修や担当者会議では双方向性を重視。「困り感の共有」「各教員のもつ暗黙知の可視化」「目指す生徒像の確認や更新」等を進めています（前田敏和先生）。

SSH研究部副部長として、どうすれば皆が意見を出しやすい場にできるか模索してい

ます。「こうしてください」とただ伝えるトップダウンになって、いたずらに軋轢を生むようなことは避けたいもの。生徒に仲間と協働の探究を求める以上、僕ら教員も「生徒のどんな力をどう伸ばすか」を、皆で楽しく探究することを目指したいと思っています（川口祐樹先生）。

ダウンロード可



研修手法をまとめた冊子も作成。目次は小誌サイトから、全体は同校HPからダウンロードできる（要アンケート回答）。

探究活動の全体の流れ

1年次に、生徒の興味・関心や自己の在り方・生き方をふまえてテーマを設定。特にテーマ設定には力を入れ、GoogleドキュメントやMiroなどの支援ツールで生徒の共創を促進

している。課題研究を支援する会議を設定し、進捗、困りごとを共有し改善につなげて生徒を支援している（小誌447号の連載「教科でキャリア教育」に関連情報あり）。

ダウンロード可 ※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス (Vol.451)

Q

評価のつけ方、ずっと模索しています…

A | 交換日記形式を用いて、生徒を日常的にも評価しています。

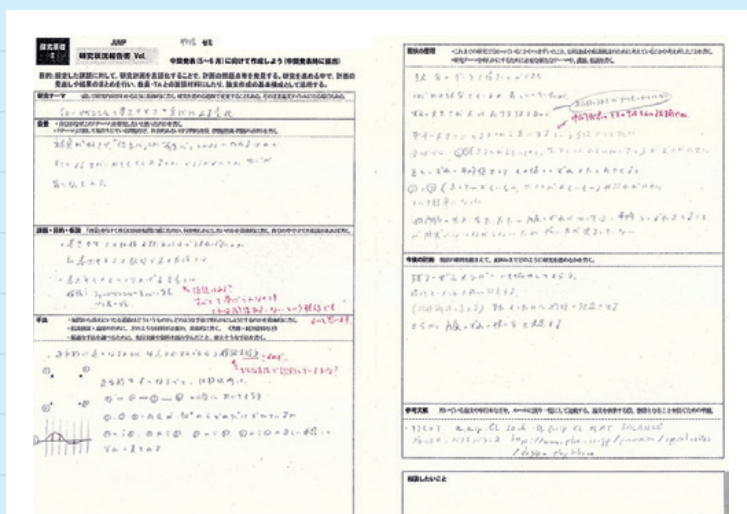
堀川高校（京都・市立） 研究部部長：濱田 悟先生

本

校で大事にしているのが、日頃の評価、いわゆるフィードバックです。教員による「評価」の本来の目的は、生徒自身が自分のできているところ・足りていないところを自覚し、目標や課題を見だし、次につなげることだと考えています。単に点数や段階を示されるだけでは、生徒は自分の現状は把握できたとしても、次にどうしたらいいかはわかりにくいですよね。ですから、成績表に載せるためにつけるもの、成果物や取り組む姿勢を総合的に見てつけるものという結果的な評価よりも、毎回の授業のなかや

日々の生徒とのやりとりのなかで伝える段階的な評価のほうが本質的だと考えています。

日常的な評価を行ううえでは、生徒一人ひとりと向き合い、「(探究を通して)この生徒はどうしたいのか、どうなりたいのか」「なぜ、この生徒は今ここで困っているのか」といったことを汲み取ることに重きを置いています。本校の探究は少人数のゼミ形式のため、授業内で生徒と面談する機会が多く、そこで進捗や困りごとを確認し、フィードバックをしています。また、「探究ノート」という生徒と教員の交換日記のようなものがあり、生徒は毎時間、授業



ダウンロード可
生徒の研究状況報告書の一例。生徒の書き込みに対して、「仮説はある?」「どんな方法で計測しているかな?」「中間発表のときのTAさんの指摘やね」など、教員が細かく突っ込みを入れている。

ダウンロード可 ※ダウンロードサイト:リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス (Vol.451)

Q 評価のつけ方、ずっと模索しています…

での気づきや課題、次に何をすべきか、どこで行き詰まっているかなどを記入し、それに対して教員がコメントを返しています。ループリック上ではさまざまな観点で評価基準を設けていますし、探究を通して身につけてほしいことは生徒とも共有していますが、探究において最も重要なのは「その生徒がどうしたいのか・どうなりたいのか」です。これは、生徒自身に聞かないとわかりません。生徒と教員がそこを共有できれば、評価の観点や基準が見えてきます。言い換えると、現状どのような課題があるか、今後に向けてどのような目標が設定できるか、次に何をしたらいいか…といったことについて、一緒に考えたり提案ができたり

するのです。

昨年度の本校の教育研究大会は、「目標・課題点を生徒と共有する評価 ～生徒が主体的に学習するために～」というテーマで行いました。生徒は、自分に足りていないもの(課題)や目標がわかったときに、モチベーションが上がり、主体的に学習に取り組めるようになるのではないかと。そのためには、生徒と教員が目標・課題点を共有するような評価のあり方が重要なのではないかと。そうした考えの下、本校では試行錯誤を続けています。

探究活動の全体の流れ

科目名の「探究基礎」は、大学での本格的な研究に備え、その基礎を身につけるという意味合いで、手法やテーマ設定もアカデミック色が強いのが特徴。1年次前期は「HOP」と位置づけ、自分の興味・関心事を掘り下げるとともに、論文や書籍などを通して根拠に基づいた論述を学び、課題設定に取り組む。「STEP」のステージである1年次後期からは、学問分野ごとにゼミに分かれて研究手法を身につけ、個人探究への助走を始める。さらに、「JUMP」とする2年次前期は個人探究に取り組み、期末には発表を行

い、最後は論文にまとめて提出する。

2022年度からは、「生徒に時間を返す」というカリキュラムコンセプトの下、7時間目の授業を一部削減。空いた時間をどう使うか、生徒自身がデザインするという取組を始めた。その一環として、新たに2年次後期に「Academic Project」を開設(必履修)。生徒の主体性を重視し、生徒が自ら指導教員を選んで相談する、大学のゼミのような形式が特徴だ。テーマや個人・グループなどの縛りは設けず、「自分のやりたいことをできるところまで追究する」ことを優先している。

A どう成長したか、プロセスを評価しています。

長崎南山高校（長崎・私立） 進路部キャリア探究課課長・総合探究委員会委員長：徳田憲一郎先生

本

校が初年度からこだわってきたのが、「成果ではなくプロセスを評価する」ということ。「探究の学びはプロセスにこそある」という考えから、探究を通してその生徒がどのように試行錯誤したのか、工夫したのか、最初の段階からどう変化・成長したのかを見取することを重視してきました。

プロセス評価の基本は、日々の授業のなかでの「見取り」と「問いかけ・フィードバック」です。教員は机間巡視しながら生徒の様子を観察し、「そのアイデアいいね」「前はこう言っていたけど、その後どうなった？」「どこで行き詰まってるの？」などと声をかけていきます。教員だけの視点に偏らないよう、長崎大学の学生や外部人材の方にもできるだけ授業に入ってもらい、多角的な視点から問いやフィードバックがもらえるようにしています。生徒には毎時間、ポートフォリオに何をやったかどう感

じたかといった振り返りを残してもらい、教員はそれに対してもフィードバックをしています。

こうした日々の積み重ねを、2年次には「プロセス論文」としてまとめ、3年次にはその論文を基に「プロセス発表会」に臨みます。いずれも、これまでの自分の取組を、つまりきも失敗も含めて振り返りながら、紆余曲折の変遷を言語化し、どんな力を使った、もしくはどんな力がついたのかをメタ認知することを大事にしています。力については、本校で磨いてほしい8つの力^{*}を提示しており、生徒はそれに当てはめて自己認識・評価をしていきます。評価で大事なものは、生徒に自分の変化や成長を実感させ、さらなる伸びにつなげることにあります。プロセス論文やプロセス発表会の評価についても、何ができた・できないではなく、次につながるフィードバックとして行っています。

プロセス評価にこだわるようになった原点は、

※探究を通して身につけたい8つの力

1. 課題発見力…物事に対して常に疑問を持ち、その問いを主体的に考える力
2. コミュニケーション力…自分自身のことを理解し、相手の立場や気持ちを尊重して話す力
3. 気づく力…物事の変化や相違点、そして自身がハッとする瞬間を大切にできる力
4. 主体性…自ら考え、計画し、行動し、振り返って次に生かす力
5. 発想力…固定観念から脱却し、他者の意見を受け入れ、発想を広げる力
6. 論理的思考力…一つひとつの物事のつながりを理解し、相手に伝える力
7. 計画力…プロジェクトを遂行するための計画や実行に向けて活動する力
8. 創造力…未来を創り上げていく際に、既存の固定概念を取り払い、新たな価値を創造する力

Q 評価のつけ方、ずっと模索しています…

私自身が感じた違和感にあります。探究を立ち上げるにあたり、さまざまな学校に視察に行きました。その先で見たあるポスター発表は、確かに成果としてはもの足りないけれど、生徒たちが一生懸命に取り組んだことがわかるものでした。しかし、周りにいた先生たちは「あれはダメだ」と否定していて。生徒が自分のやりたいことをやるのが探究のはずなのに、成果ばかりを求めるのはおかしいのではないかと、そもそも良し悪しなんて決められるのかと、納得がいかなかったのです。最初は調べることもできなかった生徒が、探究を通して自分から動けるようになった。その変化を、成長を、しっかりと認めてあげることが大事。本校ではそうした信念に基づいて評価をしています。

ダウンロード可

総合探究ワークシート (完全保存版)

◆探究課題設定ルーブリック表◆

	S	A	B	C
内容	「自分がやりたいこと」「社会で求められていること」「実現する可能性があること」「新規性」のうち3つの条件を整理して、課題を設定することができる	「自分がやりたいこと」「社会で求められていること」「実現する可能性があること」「新規性」のうち3つの条件を整理して、課題を設定することができる	「自分がやりたいこと」「社会で求められていること」「実現する可能性があること」「新規性」のうち2つの条件を整理して、課題を設定することができる	「自分がやりたいこと」「社会で求められていること」「実現する可能性があること」「新規性」のうち1つの条件を整理して、課題を設定することができる
内容構成	設定した課題について、論点が整理されており、かつ十分な説明がされている	設定した課題について、なぜ解決したいかを説明できるが、その説明に具体性がない	設定した課題について、論点が整理されており、なぜ解決したいかを説明できない	設定した課題について、具体性が欠けており、なぜ解決したいかを説明できない
態度	社会的課題(あり方)と現実のギャップを見つめ、設定した課題を自分に関わる問題としてとらえることができる	設定した課題を自分に関わる問題としてとらえることができる	社会的課題(あり方)と現実のギャップを見つめ、設定した課題を自分に関わる問題としてとらえることができる	社会的課題(あり方)と現実のギャップを見つめず、設定した課題を自分に関わる問題として捉えていない

※こちらは課題設定するとき自身のグループもしくは個人の課題の目標合わせに用います。Sランクを目標として！

(仮)探究課題を設定しよう！(課題設定の芯〜ペン図〜)

「これまでに作成した問い」と「課題設定ルーブリック表」を参考にして、以下のペン図の4つの円をすべて満たす課題を一つ設定してください。できる限り、ルーブリックの3つの観点である「内容」「内容構成」「態度」がすべてSランクになるように目指します。

上部は「探究課題設定ルーブリック表」。生徒と共有し、課題設定の際に、目線合わせに用いている。下部は課題設定のペン図。「自分がやりたいこと」「社会で求められていること」「実現する可能性があること」「新規性」の重なるところに課題を見いだす。

探究活動の全体の流れ

2019年度より探究に取り組み、試行錯誤を重ねてきた長崎南山高校。同時期より、生徒の様子から一人ひとりに適した学び方を見いだす「見取り」に力を入れ、プロセス評価におけるフィードバックにも活かしてきた。

1年次の前半には、人生の羅針盤となる自分の「Will(意志)」を深掘りするワークショップを実施。後半は、見えてきたWillに基づき課題設定を行う。2年次からは探究が本格

的にスタート。クラスを横断してテーマごとに6つのゼミに分かれ、その後は3年次の7月までゼミごとに活動する(現・高校1年生のカリキュラムの場合)。各ゼミは基本的に2名の教員が担当し、学校独自の教材を使いながら生徒の探究に伴走する。長崎県内の企業や人材など外部との連携も進んでおり、徳田先生らの呼びかけで、県内の起業家と高校生をつなげる取組も始動している。

ダウンロード可 ※ダウンロードサイト:リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス (Vol.451)





自分が習ったことない「探究」、 どうサポートしたらいい？



生徒が自ら「問い」を見いだせるように後押ししています。

宮崎東高校（宮崎・県立） 定時制課程夜間部：西山正三先生



時制夜間部の生徒には、不登校の経験のある者や、人前で話すのが苦手だった者が少なくありません。そうした生徒たちが自ら「問い」を見いだして探究できるよう、本校の定時制1年次の探究活動では、最初に自分と向き合うワークを徹底的に行い、そのうえで課題設定まで進めています。主なワークは次の通りです。

- **自分の強みを知ろう【2コマ】**……ワークシート記載の多数のキーワード（やり抜く力や慎重性等）を参考に、自分の強みとその根拠となる経験を文章化します。
- **マインドマップ【3コマ】**……連想ゲームのようにキーワードをつなげて自分の頭の中を整理します。
- **マンダラート【7コマ】**……興味あるワードをあげ、関連する本を最低1冊は読み、マンダラートと読書シートを作成。「興味の幅」を広げます。
- **哲学対話【4コマ】**……「何を言ってもいい」「否定的な態度を取らない」などのルールに基づき、生徒が問いを生み出し、考え、語り、聞くことをします。

- **5W2Hで問いを立てる【2コマ】**……興味あるワードから、はい・いいえで答えられる「閉じた問い」ではなく、簡単には答えの見つからない「開いた問い」を、5W2Hで考えます。

こうしたワークを経て、生徒が自ら問いを見いだすと、2年次以降はそこに向かって本人なりのやり方で動き出すのです。インターネットで情報収集する生徒もいれば、論文を読み込む生徒や、足を使って調べる生徒もいます。プライベートの時間も使って探究にのめりこみ、「ほかの授業を休んで探究に集中したい」と言い出した生徒もいました（笑）。

本校に赴任した時は、前任の進学校と同じような探究活動はできないだろう、と考えていました。ですが、今は本質は変わらないと感じています。例えば本校の生徒は、「興味・関心が既存の教科にはあてはまらなかったが、好きなものや才能は眠っている」と言えます。ただ、その自分の中にある思いを表に出すのを「怖がっている」ことが多いのです。同じような傾向は、前任校の生徒にも見られました。だからこそ、探究活動に関わる先生方には、



Q 自分が習ったことない「探究」、どうサポートしたらいい？

● 哲学対話のルール

ダウンロード可

哲学対話の基本的なルール

- ①何を言ってもいい
- ②人の言うことに対して否定的な態度をとらない
- ③発言せず、ただ聞いているだけでもいい
- ④お互いに問いかけるようにする
- ⑤知識ではなく、自分の経験にそくして話す
- ⑥話がまとまらなくてもいい
- ⑦意見が変わってもいい
- ⑧分からなくなってもいい

● 5W2Hで問いを立てる

ダウンロード可

5W2Hで問いを聞いた問いに書き換えて、更に発展させてみよう
 哲学対話を受講する前に、今まで自分たちが行ってきたマインドマップやマンダラートなどを参考に
 にして、キーワードを取り出し、問いを発展させていってみよう。 全て必ず？で終わるようにしよう！

テーマ名 (問いの名前)	イテゴは赤くなるのか？	聞いた問い (△) か聞いた問い (○) か	△	氏名			
				()			
	何が (を)	いつ	どこで	誰が (に)	なぜ	どのくらい	どうやって
	What	When	Where	Who	Why	How many	How
1 疑問詞を実 てみる (聞い た問いに書き換 える)		イテゴはいつ赤 くなるのか？	イテゴはこの 地方でよくとれ るのか？		イテゴはなぜ赤 くなるのか？		
2 発展させた 問い (字々に見 つからない問い を考へてみる) ここが探究学習 のテーマ (課題 設定) となる		イテゴを長い間 悩まずに答へる にあたり最適な 取組時間はいつ か？	イテゴはどう いった気候条件 でよくとれるの か？				イテゴはどのよ うな仕組みで赤 くなるのか？

参考：課題研究メソッド2ndEdition Teacher'sManual P65

思うからです。

定時制夜間部は、以前は半数近くが中退することもありましたが、ここ数年はほとんど退学者が出ていません。探究で自発的な読み書きをするからか、総じて国語の成績も伸

長。ある生徒は、興味の幅をアニメから経済まで広げて簿記の資格を取って進学し、別の生徒は、探究の成果で国際シンポジウムで最優秀賞を取るなど、個々の生徒が秘めていた力を発揮することも増えてきています。

探究活動の全体の流れ

1年次は「自己探究」で、自分と向き合うワークから課題設定まで進める。2年次は「社会探究」で、課題に基づく探究にチャレンジ。3・4年次の「進路探究」では、今までのワークやノウハウを活かし、進路実現に挑む。

例年11月には全学年・全生徒による成果発表会があり、1月に各年次代表による発表会も。また、定時制の探究活動の全国大会という位置づけで、「結果ではなく、どのくら

い自分の好きなものを探究できたか」を発表し合う「過程重視探究発表会」も、同校がホストとなり3月に開催している。

同校の生徒がこれまでに取り組んだ探究テーマについて、一例をあげれば、「なぜ人に好かれようとするのか」「コスパ最強の地図作製法」「民衆が日清戦争・日露戦争に賛同した理由」「人を感動させるコツ」「ゴキブリが嫌われる原因は何だろう」などがある。



Q 自分が習ったことない「探究」、どうサポートしたらいい？

ダウンロード可

A 教員自身が探究をやってみました。

富士東高校（静岡・県立） 探究委員長：鈴木翔太先生、伊藤智章先生

教

員が探究し、1年生の前で発表することを、昨年度の6月に行いました。その実践も参考に、生徒がいろいろな視点から探究活動に臨めるようにするためです。探究をしたのは1学年の教員全員。私は大学時代に研究した「古代ギリシャの国葬」のことをまとめ直しました。探究の仕方は各自に委ねられ、最初は戸惑う先生もいましたが、最終的には皆さん、その先生の色を出した発表をされていたと思います。生徒からは「先生たちが楽しそうで聞いていても楽しかった」「知らなかった分野に興味をもてた」「好きなことを突き詰めるのが大切だと感じた」などの感想がありました（鈴木翔太先生）。

教員の発表は、体育館で一斉に、生徒が行き先を選べる形で行いました。生徒も1年

次の終わりには、同じように体育館で発表するからです。内容次第で人の集まり

に差が出るわけで（笑）、教室に行けば生徒がいる普通の授業とは異なる体験でした。ネタの面白さを吟味し、伝え方を工夫し、発表してみて「意外とここは響かないんだ」「この生徒はこういうのが好きなんだ」と気づいたり。生徒もそのように探究に挑むだけに気持ちを理解しやすくなった良さもありました。私の発表テーマは、今までの授業実践を踏まえた「探究における地図の使い方」。普段の教科の授業でも生徒にその視点を育みたいと改めて思いました（伊藤智章先生）。



学校だよりも先生の探究をレポート。

探究活動の全体の流れ

1～2年次に個人およびグループで探究を行い、3年次にその経験を志望理由書や自己PR等に活かし、進路実現を目指す。探究の「問い」を生徒が自ら設定できるよう、「さまざまな視点にふれる機会」を重視。昨年度

は教員による探究の発表を行い、今年度は3学年合同で先輩が後輩に探究を語る座談会を実施。静岡県立大学との連携で、校内での大学教授や大学生による講義も行っている。

ダウンロード可 ※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス (Vol.451)



どうしたら在り方・生き方や進路につながる?

A

探究を伴走した教員が、進路の相談にも乗っています。

青翔開智中学校・高校（鳥取・私立） 探究部主任（SSH担当）：田村幹樹先生、進路支援部主任：森川真吾先生

本

校では、高校2年次に個人で課題研究に取り組み、3年次にはその成果を論文にまとめたうえで、進路やキャリアを考えていきます。個人探究（課題研究）と進路については、生徒1人に教員1人が付いて伴走します。2年間を通して同じ教員が担当し、生徒がたどった探究プロセスをそばで見えてきた教員が、進路選択に当たっても、対話を通して生徒が自らの道を見いだすサポートをしています。

探究で肝になるのが、テーマ設定です。私たちは、「好きなこと（興味・関心）」「得意なこと（能力）」「大切なこと（価値観）」「社会から求められること（社会）」が重なる部分にテーマがあると考えています。生徒たちはこの

4つの視点で「こと」を書き出しつつ、大学で何を学びたいか、将来はどんな仕事をしたいか、どうありたい・生きていきたいか…といったことも考えながら、テーマを絞っていきます。本校の卒業生は、結果として課題研究のテーマと関連のある分野に進むケースが多いですが、進学先や大学受験から逆算してテーマを選ぶ指導はしていません。探究に取り組んだ結果、それが進路や受験につながればそれはそれでいいし、直接的につながらなくたっていい。そもそも探究は分野横断的なものですから何らかの関連性があることが多いですし、本当の意味でその「成果」を感じるのには、今ではなく10年後かもしれないのですから。

探究活動の全体の流れ

開校当初から探究を軸に据えた教育を実践。中高6年間を通して探究に取り組み、「課題を創造的に解決できる人」になることを目指している。総合型選抜・学校推薦型選

抜による大学進学者も多く、学校のホームページ等では、卒業生の進路（進学先）とその生徒が高校で取り組んだ課題研究のテーマの一覧を公開している。



Q どうしたら在り方・生き方や進路につながる?

A 探究と進路を地続きと捉え、卒業生の手も借りています。

ふたば未来学園高校（福島・県立）企画研究開発部主任：林 裕文先生

探

究と進路を地続きのものと捉え、生徒に伴走しています。就職希望だった生徒が探究をきっかけに大学進学に切り替えたり、探究で取り組んだ原子力についてもっと深めたいと大学で研究する道を選んだり、探究と進路が一体化した生徒は強い軸をもって、モチベーションも高いんですね。そんな姿を見て、探究と進路とつなぐことが大切だと、私たちも考えるようになったのです。興味深いのが、探究のテーマが大学の学問分野に直接的につながるというよりは、探究を通じた出会いや生まれたつながりが進路選択に影響を与えるケースが多いということ。漠然と「小学生と何かをしたい」と探究を始めた生徒が、教員との対話から小学校で絵を描くというアクションにつながり、

先生になりたいと大学に進学し、教育実習生として本校に戻ってきた…というケースもありました。目指す姿から逆算して決めるだけでなく、偶然出会ったものから自分の手で選び取っていくのも進路の決め方なのではないか。この学校に来て、私自身のキャリア指導観も大きく変わりました。

また、コロナ禍中には「卒業したって探究は続くんです」というオンラインイベントを卒業生が主催し、高校時代に夢中になった探究や大学での学びについて発表しました。反響が大きかったので、今年5月には私たちが卒業生に呼びかけてポスターセッションを開催しました。ロールモデルとなる卒業生の存在は大きいと感じています。

探究活動の全体の流れ

「未来創造探究」では地域や身の回りの課題に取り組むことを通して未来の社会や自分をつくっていく。1年次後半にはプレ探究に取り組み、課題テーマを模索。2年次から

は6つのゼミに分かれ、3年次前半まで個人やグループごとに探究に取り組み、最後は発表して論文にまとめる。



探究の「具体的な価値」がまだ見えなくて…

A

生徒の学びの主体性や挑戦する意欲が高まりました。

札幌藻岩高校（北海道・市立） 探究計画部長：千葉建二先生、進路部長：長井 翔先生

地

域と関わる探究に、本校が乗り出したのは8年前。当初はまさに「なぜやらなきゃいけないの?」という空気でした。生徒から「その時間に受験勉強をさせて」という署名活動が起きたほどです。僕らが探究の意義を伝えきれていなかったからだと思います。ですが、活動を重ねていくと「この経験が自分の糧になる」と実感する生徒が増えていったんですよ。今では総合型選抜や学校推薦型選抜で、多くの生徒が探究の話をしします。期待を上回る自走をす

る生徒も増え、学校全体で「生徒のやりたいことをベースに探究を進める」体制ができると、明確なビジョンをもって取り組む生徒も激増。探究は「特別な生徒」だけ熱心になると思われがちですが、本校ではほとんどの生徒が探究に前向きで、それを「普通のこと」と捉えています。

一番の変化として感じるのは「卒業後の活躍を聞くことが増えた」ことです。蓋が外れたのか、進学先など今いる場所でもチャレンジをし続けているのです。

4-7 MSPの変遷 生徒・学校・地域が変態①

	1年目 2018	2年目 2019	3年目 2020
生徒	突然の地域探究へのギャップ 「先輩やってないのに・・・」 「南区に住んでないし・・・」 「勉強させてほしい」	受容・やりがい・成長実感 「まあ、やるもんだらう」 「南区にこんな魅力あるんだ」 「将来に役立つ!」	MSPへの期待・枠をはみ出す 自走増（ちょっと暴走も） 「こんなプランあります」 「今週MSPないんですか?」
学校・教員	批判的・懐疑的 「こんなの意味がない」 「やらせすぎだ」 「生徒の時間を奪うな」	受容・協力的 タスク・スケジュール管理中心 「昨年の生徒の変容は?」 「生徒にどう関わればいい?」	チャレ各教員 「〇〇」 「△△」
地域	協力・協働 ・活動の場を提供 ・地域のやり方を優先 ・高校生への期待薄 ・学校の取組への協力	協働・共創 ・活躍の場を提供 ・生徒に任せてくれる ・高校生のアイデアが活 ・高校生の成長に寄り添	

探究による学校の変化をまとめたスライド。生徒から先生や地域にも良い影響が波及していることが見てとれる。

探究&単位制による生徒の変容 9月実施 進路調査

- 学習に取り組む姿勢
- S 自分の中で課題意識を持ち、その達成に向けて学校の課題はもちろん、その他の自分なりの学習に取り組んでいる。
 - A 自分なりの学習に取り組みたいが、なかなか時間を作り出すことができず、宿題や課題にのみ取り組んでいる。
 - B 学校の勉強が難しく、授業についていけないこともあり、宿題や課題も遅れることがある。
 - C 学習へ取り組みの機会はほとんどない。



学びの主体は「自分」というマインド



Q 探究の「具体的な価値」がまだ見えなくて…

探究学習を推進したのは、生徒が外のリアルな場にふれて、より生き生きと学んでほしかったからでした。今はそれに加えて、そんな生徒や地域の人と接するなかで「自分自身が変化していく」のも本当に楽しい、と感じています(千葉建二先生)。

昨年度まで3年間持ち上がりで関わった生徒たちに、探究学習などでどんな変容があったかを、生徒のアンケート調査のデータを基に分析してみました。

そのなかで見えてきたのは、学習に取り組む姿勢が明らかに変化していたことでした。「自分なりの課題意識をもって学習に取り組んでいる」生徒は、以前の5割以下から7割に増加。「取り組みたい」とする生徒も加えると9割超で、「学びの主体は『自分』」という意識が強まったようです。「部活動や課外活動で受け身にならず自分から動いた」「学校内外

でチャレンジすることができた」生徒も8割超まで伸ばしました。

こうした変容のあった生徒たちは、受験でも過去最高レベルの結果を出したんです。それも、推薦で受からなかった生徒が諦めずに一般選抜にも挑み、第一志望に合格するなど、総合型・学校推薦型選抜にとどまらず、一般選抜で力を発揮した生徒も多かったのです。加えて、推薦などで年内に進路が決まった生徒は、以前は気が抜けやすい印象がありました。今では「合格が決まったからこそ、残された高校生活で自分のやりたいことに打ち込む」という傾向が見られます。

自分としては、探究で培ったそうした意識や姿勢が世の中でどう生きるか研究し、生徒たちの活躍を一層後押ししたいと思っています(長井 翔先生)。

探究活動の全体の流れ

1年次に「本物」にふれる機会を数多く用意し(大学や地域でのフィールドワーク等)、生徒が社会の中で自分軸を発見。2年次には学校のある南区で地域貢献や課題解決に挑み、後半ではその経験も踏まえて自己の未来を描き、行動する。3年次は各自が学校設定科目などで自分のやりたいことを深める。

2021年度より単位制に移行し、生徒たちは探究を進めながら自身で多くの授業を選択するようになった。このことが、「学びの主体は『自分』」という意識を高める相乗効果を生んだのではないかと長井先生は分析している。

Q 探究の「具体的な価値」がまだ見えなくて…

A 探究が、教科指導の向上や改善にもつながりました。

高崎高校(群馬・県立) SSH主任:岡田直之先生、SSH副主任:鈴木幸英先生

本

校では、実社会・実生活から生じる「問い」を複数教科の知識・技能を活用して深める「クロスカリキュラム授業」を推進しています。全教員が、年1回は、他教科の先生と組んで、互いの教科の視点を活かしながら「問い」を考え、教科横断型授業を開発・実践するのです。生徒はその授業のなかで「知の活用」を体感し、その経験も活かして、自分のテーマを探究する課題研究に挑んでいきます。

こうした取組は「教員の指導力向上や授業改善に役立つか」について、例年アンケートを取っています。結果、「とてもそう思う」と答える先生は年々増加し、8年前は29%だったのが、去年は65%に。「そう思う」と答えた先生も合わせると9割以上が肯定しています。主な理由は「教材開発で発見がある」「他の先生の視点や着想、手法を得られる」「教科間の連携が促進される」というもの。本校のクロスカリキュラムは、深い学びのプロセスである「習得」「活用」「探究」のうち、「活用」を意識しています。クロスカリキュラムによって普段の授業と探究を

つなぎ、深い学びの実現を目指します(鈴木幸英先生)。

生徒は自身の課題研究を通して、科学的アプローチ、データ処理、ロジックのまとめ方、ルーブリックによる評価なども実践的に学びます。最近では、そうした探究で身につけたことを、普段の教科の授業でも活かすよう、先生方が生徒に促しています。「仮説・検証しよう」「ロジックを整えて」「ルーブリックを使うよ」などと。「探究でもやったよね」と。探究と普段の授業とのつながりを意識した声かけをすることで、どのような場面でも活用できる汎用的な見方・考え方が身につけられると思います。

課題研究では「武器は何を使ってもいい、使える知識や技能を自分で手に入れて。高校生の枠にとらわれないで」と呼びかけています。すると、自分で学んでどこまでも伸びていく生徒が出てくるんです。そうした生徒の探究と一緒にわくわくできるというのも、一律の授業だけであつたら味わえなかった体験だと思っています(岡田直之先生)。

Q 探究の「具体的な価値」がまだ見えなくて…

探究活動の全体の流れ

「知の活用」として教科横断型のクロスカリキュラム授業を展開。「知の深化」として、3年間を通じた課題研究に全校生徒が取り組む。また、「知の交流」として、科学的対話スキルの習得を目指し、データサイエンスやプレゼンテーション等について体験的に学習す

る。同校ホームページのSSH事業紹介ページでは、これまでに開発・実践されてきたクロスカリキュラム授業の指導案や課題研究の教材等を確認できる。また、2024年12月には、これまでの研究成果を踏まえた公開授業も予定されている。

編集後記

探究の山を登る

今号は、2022年から本格実施となった「総合的な探究の時間」について、改めて特集いたしました。各学校での取り組み内容を元に、生徒の変化や成長、進路選択への影響のみならず、その裏側にある先生方の葛藤、苦勞、工夫なども、実施から少し時間が経った今だからこそ具体的なお話を伺うことができました。

探究学習に対しては、捉えどころのない難しさを感じている方もいらっしゃるかもしれません。しかし、取材を通して見えてきたのは、探究学習は必ずしも「型」や「ステップ」に当てはめていく必要はなく、それぞれの学校や地域、生徒に合った活動を模索し続けていく、過程そのものを楽しむ姿。あり方に正解がないからこそ、そのような心の持ちようが、大切なかもしれないと僭越ながら感じました。

私たち編集部も、探究学習についてこれからも取材を重ねることで、その深化を共に学ばせていただき、今後も編集と情報発信を通して、探究活動の一助となるよう努めて参ります。